
公益財団法人福武財団

地域振興助成

2020年度アートによる地域振興助成
成果報告書（事業延長）

Fukutake Foundation

事業名	イシノマキ アート はい!スクール ーモヤモヤよ、こんにちはー		
団体名	一般社団法人 Reborn-Art Festival	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	松村 豪太	活動地域(都道府県名)	宮城県 詳細エリア 石巻(市街地、牡鹿半島など)

活動の目的

震災から10年を迎えた石巻に発動させた若手世代を対象にしたスクールプロジェクト。高校生世代に焦点をあて、アーティストや表現者、地域活動団体によるレクチャーやワークショップなどを学校外で実施。多様なジャンルの表現者や活動家を講師に迎え、今、起こっている町の変化や、地元にある創造的な生き方・実践を対話方式で知ることができる機会を作りながら、家や学校では得難い経験や未知の価値観に触れ、地元と向き合う。ゆくゆくは、参加者自身が企画立案したり、表現活動をしたりするなど、地域で行動を起こす基盤になるような交流や機会にしていこう。また、Reborn-Art Festivalをきっかけに派生したアーティストと地域とのつながりやプロジェクトを、会期以外の地域の日常で展開できるような連動を目指した。

活動の内容

- 1 街歩き ここではないどこか/ギャラリーや工房、人を訪ねる定期企画。
- 2 フィールドアクションin石巻/通学路や川沿い舞台にしたりサーチと発表。2022年の本祭につながる仕掛けの検討。
- 3 オンライン授業/「《金時》を見かけてどうでしたか。」「アートのあれこれQ&A!先輩たちが答えます!」。「地理人がみる石巻一地図感覚で石巻をみてみると…?」。オンライン談話室の実施。
- 4 3.11を持ち寄る会/地元の写真家Ammyによる、地域の方と3.11を振り返るイベント。
- 5 学校連携/美術部を対象にした会期中の作品鑑賞。石巻で継続している職業体験企画「街ミッション」と連動し、過去の作品会場を訪れるツアーの実施。今後の連携の相談。
- 6 はい!スクール本棚の設置/参考図書などの蔵書、貸し出し。

参加作家、参加人数 ※活動の内容ごとに掲載

- 1 石巻のキワマリ荘、有馬かおる、廣瀬智史他(計4回、12名)
- 2 梅田哲也(リサーチ1名、発表約50名)
- 3 ちばふみ枝、中崎透、富井大裕、地理人(今和泉隆之)、Yotta、ミシオ、平野将馬(オンライン授業合計16名。談話室4回実施で12名)
- 4 Ammy(5名)
- 5 市内高校2校(合計23名)

他機関との連携状況

いしのまき学校(街ミッション)、市内高校美術部。地元アートスペース mado-beya。菊池旅館、まちづくりまんぼう等と、連動企画や会場提供、講師としての参加など。

活動の効果

同じ地域であっても足を踏み入れる機会が持ちにくい、アートスペースや工房訪問を実施し、活動拠点現場での交流や、人を知るきっかけを設定することができた。参加者は地域の特徴や資源をより具体的なイメージを掴んで楽しみ、若手世代が一人では気づけなかった地元の特徴を知ること、将来的に参加者がそれぞれの地元の関わり(企画の実践の場、仲間を見つける、事業を始める)を持つ動機づけとなった。

活動の独自性

東日本大震災以降、クリエイティブな活動が活発になったり、アーティストなどの出入りがある石巻の環境を生かしながら、多様な視点や地元の特徴を知る・関わりはじめたりすることにより、これから世代の活動基盤につなげる。サブタイトル「モヤモヤよ、こんにちは」にあるように、普段一人では向き合いたらいことや考えなかったようなことを、講師に迎えた地元で活動する大人や、アーティスト等の実践や存在を通して、知る・気づいていくきっかけにする。「街歩き ここではないどこか」「3.11を持ち寄る会」のように、特別なことではなくても、今の資源や人の生き方を活かしたり、地元発信で掘り下げられたりするような企画が生まれつつある。

総括

地域の高校生世代にアートを切り口にアプローチを試みていたが、「絵を上手く描きたい」「作品を発表する場」というようなイメージしやすいことへの期待が多かったものの、今の石巻で向き合うこと、新たな視点を持つこと、「モヤモヤよ、こんにちは」につなげていこうな展開を目指した。参加人数が莫大ではないものの、何かすぶっているユニークな高校生などが参加し、独自でギャラリーに行くようになるなどの動きが生まれている。また、Reborn-Art Festival本祭では連動できていなかった地域内の個人やスペースなどと連動しやすくなり、日常で活動していくからその規模感で進められた。今後はまずは継続が課題だ。企画自体も単発のものが多かったが、Reborn-Art Festivalの常設作品や、関連作家の継続プロジェクトと連動することで、より地域に根ざしたやり方を工夫し、学校の部活や授業にお邪魔するなどの、地道なやりとりを通して関わりのハードルを下げたい。また、新型コロナウイルス感染症対策の中での実施となり、学校への直接的なアプローチができず、野外での活動や、オンラインを通じた方法を模索した。対面が難しく参加者の温度感を測りづらかったが、オンラインだからその気軽さや、アーカイブになることで地域を問わない参加者や石巻の発信につながった。



配信トーク「アートのあれこれQ&A!」



街歩き ここではないどこか



「《金時》を見かけてどうでしたか」

事業名	PARADISE AIR		
団体名	一般社団 PAIR	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	森 純平	活動地域(都道府県名)	千葉県 詳細エリア 松戸市

活動の目的

PARADISE AIRは国内外のアーティストを対象として、松戸を拠点にアーティスト・イン・レジデンスの運営を行っている。アーティストとしてただ街にいられるように滞り場所と制作活動への支援を提供することで、彼らのキャリアアップやリフレッシュの場となっている。また、滞在制作をきっかけに、行政、地域団体、市民との様々なつながりが生まれ、文化を育んでいる。運営主体(一般社団PAIR)は多様な専門性をもつフリーランスによって構成されるコレクティブ組織であり、彼らをはじめとする文化芸術従事者の新たなつながりや仕事を生み出す場である。

活動の内容

運営をはじめて約8年、事業の実施に集中してきたため、いかに事業を価値化していくか、評価していくかに時間を割くことがあまりなかった。今回10周年を目前とするタイミングで、なかなか評価のしづらいアーティスト・イン・レジデンスの事業評価について、全国でレジデンス、助成などに関わる3団体(セゾン文化財団、青森公立大学 国際芸術センター青森(Aomori Contemporary Art Centre 以下ACACと略)、アッセンブリッジ・ナゴヤ)に、個別にそれぞれの活動の紹介、並びに事業評価、長期的な運営に関する議論を行った。ACACのみ現地にて、他は基本的にオンラインにて実施となったが、ヒアリングとは別の機会に現地視察などを行った。それらを経てPARADISE AIRとして今後の事業評価の検討、レポート等のWEBサイトへの公開を実施した。

参加作家、参加人数

セゾン文化財団 1名
 青森公立大学国際芸術センター青森 2名
 アッセンブリッジ・ナゴヤ 2名
 PARADISEAIR メンバー 10名

他機関との連携状況

セゾン文化財団
 ACAC
 アッセンブリッジ・ナゴヤ他

活動の効果

当初の計画の意図にそってそれぞれの活動を共有することによって、事業評価を考える機会になった他、各団体が想像以上に事業を柔軟に転換してきたお話を伺うことができた。これまでの蓄積をふまえつつも、大きな変化に対してもポジティブに考える姿勢を強めることができた。

活動の独自性

PARADISE AIRの活動の意義は、その現場に携わるメンバーによっておぼろげに認識されているものの、評価、つまり成果や価値の言語化や、それを裏付ける資料を残し活用する方法は現場の試行錯誤に委ねられており、運営組織内やステークホルダーとの間で共通認識を持ったり、さらには第三者が確認可能なかたちで開いていくことには、本業であるアーティストの受け入れとのバランスのなかで難しさがあった。

そこで、このプロジェクトでは、アーティスト・イン・レジデンスを通じてみる可能性の芽をいかに文化事業として評価するのか、その視座や方法について考え、同様の事業を行う他者とノウハウを共有し、連帯していくことを目的に、ピアレビューを行った。自分の姿を自分で見ることは困難である。けれども、ピアの活動を鏡にして見ることで、お互いの特徴が見えてきた。

総括

- セゾン文化財団
 「創造活動への支援」「長期的視点に立った継続的な支援」「資金提供のみでない複合的な支援」という方針の下、先例のない助成プログラムや環境整備・人材育成プログラムを次々に生み出してきたセゾン文化財団とともに、アーティストの制作活動をどのように支援し、成果を評価し、プログラムを更新していくのかについて考えた。
- ACAC
 アーティスト・イン・レジデンスといっても、場所や歴史、運営主体などによってその具体的なあり方はさまざまである。首都圏の交通の要所にあり滞在を主な機能とするPARADISE AIRと、地方都市の自然の中にあり、企画・制作から発表・アーカイブまでをトータルに支援するACAC。松戸とは対照的な環境でアーティスト・イン・レジデンスを運営するACACと共に、市民との関わりを持ち方、運営組織の持続性などについて考えた。
- アッセンブリッジ・ナゴヤ
 名古屋のまちづくり団体を中心にはじまったフェスティバルから、最近アーティスト・イン・レジデンス事業に移行したアッセンブリッジ・ナゴヤとともに、持続する場を持ち続けることの意味や、エピソードベースの成果を可視化する方法について考えた。



ACACでの視察風景



滞在アーティストとのZOOMMTGの様子

事業名	モモモンタージュ・オオヅチ		
団体名	映像ワークショップ	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	木村 悟之	活動地域（都道府県名）	石川県 詳細エリア 加賀市山中温泉大土町

活動の目的

加賀市山中温泉大土町は、加賀市東南部の山奥、東谷地区の最奥部に位置する集落である。本事業開始時(2020年)、住民は80歳代と60歳代の親子2人であったが、2021年以降は、60歳代の男性1人となった。大土町は集落消滅の危機に直面しており、「集落の存続と活性化」が地域の課題である。モモモンタージュ・プロジェクトでは、映像のアーカイブ活動によって、大土町の成り立ちへの興味を繋いだ新たなコミュニティを出現させることを目指している。この目標にあたり、本事業では郷土映像資料における閲覧システムの構築を整えることを目的とする。

活動の内容

2021年度までに収集された資料(写真825点・動画5点・小冊子2点)の一般公開に向けて、閲覧システムの構築を行った。閲覧プラットフォームは現在公開にむけて制作中である。併行して、3つのイベントを開催した。2021年9月20日、オンライン・ワークショップ『ボードゲームづくりで学ぶ地域の未来』を開催。同年10月17日、イベント『大土町・町歌(山レディオ 第2回)』を現地とオンラインのハイブリッドで開催。2022年3月11・12日、「世田谷クロニクル1936-83」やAHA!で活動する松本篤さんをゲストに迎え、オンライン・トークイベント『地域の記憶を現在と未来に活かす「コミュニティ・アーカイブ」』を開催した。

参加作家、参加人数

『ボードゲームづくりで学ぶ地域の未来』
 ゲスト/林直樹(金沢大学准教授)氏、会田大也(山口情報芸術センター[YCAM]学芸普及課長)氏
 参加人数 12人
 『地域の記憶を現在と未来に活かす「コミュニティ・アーカイブ」』
 ゲスト/松本篤氏
 視聴者 71人

他機関との連携状況

開催地の市町、加賀市立図書館、一般社団おおづち、NGO NICE(日本国際ワークキャンプセンター)、金沢大学地域創造学類などと連携して事業を実施した。

活動の効果

2021年9月からは「加賀市立図書館が所蔵する市史等の資料及び地区等で保有する郷土資料等のアーカイブ」事業を加賀市より受託し、大土町から市内全域へと活動領域を広げることとなった。これに伴い、映像の専門家1名と、ウェブエンジニア1名を新たに迎え、2024年8月までともに進める予定。また、資料の活用においては、『地域の記憶を現在と未来に活かす「コミュニティ・アーカイブ」』で展開した議論を通じて、今後の可能性についてのコメントが多く寄せられた。

活動の独自性

本事業は、大土町の消滅危機に直面して企画された。企画の独自性は、「資料のアーカイブ活動」を通じて地域のコミュニティをつくらうことにある。大土町のような山奥の小集落に新たに住み続けることは、市街地へのアクセスの悪さや冬期の積雪の多さから、現実的に難しい。そこで、たとえ住民がゼロになっても集落の田畑や建物が若い世代に引き継がれるような体制を整えるために、大土町へ関心を寄せ続ける関係人口を増やしていきたいという思いがベースにある。若い世代にむけて、デジタルアーカイブソフトウェア「MediaWiki」を導入して閲覧システムを構築した。このソフトウェアはもともと、オンライン参加型の百科事典「Wikipedia」用に開発されたもので、閲覧者は手軽に記事の投稿・編集を行うことができる。

総括

当初の計画では、収集資料を活用して現地でワークショップやレクチャーイベントを開催することを重視したが、コロナ禍によりオンラインでの開催となった。思うように効果があがらず、このまま遂行することの難しさを実感した。2021年度は、ウェブエンジニアと映像の専門家を新たにスタッフに迎え、既に収集した資料のオンライン公開に向けて閲覧システムの構築に注力した。2022年3月にシステムが完成し、現在は、デジタル化した収集資料に一つずつタグを付与しながら、データのアップロードを行っている。また、一方で各資料の著作権処理も進めている。収集した資料は、撮影場所や年代などが特定できないものも多い。閲覧サイトを通じて、未完のアーカイブを多くの参加者とともに仕上げていこうなプラットフォームを目指したい。また、アーカイブ活動と併行して行ってきた資料の活用イベントにおいて、特に記述したいのは『地域の記憶を現在と未来に活かす「コミュニティ・アーカイブ」』である。郷土資料アーカイブを行う団体どうして、方法や目的を共有し、ネットワークを作ることの重要性を実感した。今後は、こうしたネットワークづくりに注力したい。



オンライン・トークイベント (チラシ)
 イラスト 鏡頭verymuch



オンライン・トークイベント (配信画面)



資料閲覧用ウェブサイト
 (スクリーンショット)

事業名	北アルプス国際芸術祭 2020-2021		
団体名	北アルプス国際芸術祭実行委員会	実施期間	2021年8月21日～11月21日
代表者名	牛越 徹	活動地域(都道府県名)	長野県 詳細エリア 大町市

活動の目的

新型コロナウイルス感染拡大の影響により延期していた「北アルプス国際芸術祭2020-2021」を地域住民、地域関係団体、長野県、市が一体となり徹底した感染対策を施し開催し、芸術文化の振興と多様な人々の交流、国内外への強い発信を加速させていく。また、アートを起点にしたまちづくりが芸術文化の振興に留まらず、地域ブランドの向上、ひとづくり、社会課題への対応、環境との共存など幅広い分野に寄与していき、地方創生のモデルケースとして持続可能な地域社会の構築を進め、住民が元気で魅力的な地域になることを目指す。

活動の内容

北アルプス国際芸術祭2020-2021を開催

1 アートプロジェクト

11の国と地域から36組のアーティストが参加。北アルプスの麓に位置する大町市全域をフィールドに、この地域の自然の豊かさを表す「水・木・土・空」をコンセプトとした、サイトスペシフィックな34個の現代アート作品と、3つのパフォーマンスを展開。大町市の魅力を広くPRした。

2 食プロジェクト

当地域では昔から農作業の合間に食べる食事を「おこひる」と呼ぶ。地域のお母さんたちが、地元食材を使用した特別なお弁当を、郷土の歴史や食文化の語りとともに提供する「地彩レストランおこひるの食堂」を開設し、大町の伝統的な食文化を広く発信した。

参加作家、参加人数

作品数 37作品(内パフォーマンス3点)

アーティスト 11の国と地域から36組

来場者 33,892名

ワークショップ参加者 580名

他機関との連携状況

大町市、大町市教育委員会、長野県、北アルプス広域連合、東京都立川市、大町市観光協会、市内飲食店事業者、宿泊事業者、近隣美術館、信州大学等

活動の効果

大町市の資源を『アート』という形で価値を見出したことで、多くの人を呼び込むことに成功した。地元住民からは「地元の魅力が再発見できた」との声を多くいただき、地域に愛着と誇りを持つシビックプライドの醸成にも繋がった。また、北アルプス国際芸術祭2020-2021を契機に、地域ポータルサイトの構築や地域ECを開始し、これにより新たな層に対して大町市をアピールすることが出来た。

活動の独自性

大町市では、国からSDGs未来都市として認定されたことを契機に、大町市とSDGsの取り組みを積極的に推進している企業を中心となり、100年先を見据えた「まち・ひと・しごとづくり」を実現し、サステナブルなモデルタウンを目指す「みずのわプロジェクト」が令和2年12月に発足された。当初より、大町市の地域資源である「水」を起点としたまちづくりの方向性を一にしていた「北アルプス国際芸術祭」と「みずのわプロジェクト」は連携・協働を進めていくことを決め、産官学金の強い連携の下、知名度の向上とともに生み出される大きな人の流れを、移住・定住に繋げ、持続可能なまちづくりを進めている。

総括

新型コロナウイルスの影響で2度の延期を経ての開催となった。ちょうど感染状況が落ち着いた時期だったことも幸いし、会期中に市内感染者を一人も出すことなく終えられ、来場者やスタッフの安全は確保できたと考えている。コロナ禍という状況の為、住民が作品制作や運営に携わった地域は一部にとどまり、ボランティアサポーターの参加も制限をかけたざるを得なかったことは残念であるが、様々な課題を抱える中でも出来る限りの工夫を凝らせば、イベントを行えることを証明できたリーディングケースとなるもので、開催した意義は大きいと感じている。アート作品を通して、地元住民にとっては「当たり前」のものが、市外の人にとって「うらやましい」ものとなり、何度もこの街を訪れてくれる「大町ファン」を生み出すきっかけとなった。地道なことであるが、これが「定住」や「関係人口」の増加に結びついていくものと信じている。北アルプス国際芸術祭は一過性のイベントではなく、地域としてのブランド力向上と地域再生という将来に向けて大町市が持続可能な街として存続していくことを理念に掲げている活動であり、今後も更に力を入れて活動を継続していきたい。



アート作品を鑑賞する来場者の方々



「地彩レストランおこひるの食堂」の様子



受付スタッフの皆さん

事業名	島・まるごと！美術館計画		
団体名	高見島プロジェクト	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	内田 晴之	活動地域（都道府県名）	香川県 詳細エリア 高見島

活動の目的

高見島を1つの美術館として捉え直し運営することで、人々が集まりゆったりと芸術を楽しめる場所に、同時に島の伝統的な家屋や景観を守ることが、このプロジェクトの目的である。現在、空き家は放置され、崩壊してきている。少しの補修、修理で現状維持が可能な今のタイミングで手を打つ必要がある。崩壊してからでは間に合わないため、迅速な活動が求められている。

活動の内容

まず、高見島の空き家の現状調査を行い、倒壊状況など具体的に把握する。その上で最低でも1年に2軒の空き家を修理し、景観保護の一助にする。これらの活動は、高見島の場所作りに向けた5年計画の基準となる。3年に一度開催される瀬戸内国際芸術祭での作品制作と空き家修理の2つの活動を、クオリティーを高めながら継続して続ける。この積み重ねで島へのリピーターを増やし、常設作品を増やすことで芸術祭以外の年にも楽しめる場所作りを目指す。加えて、高見島ミュージアムショップ運営を計画している。2022年の瀬戸内国際芸術祭にショップを運営できるよう、場所作り、記録集の販売、小さなグッズだけでなく若手作家の作品を販売できるよう、計画を進めている。

参加作家、参加人数

作品が継続設置となった作家5名に加え、2022年に新たに作品を制作する芸術祭参加作家6名を加えた11名が参加している。加えて、多度津町、多度津高校、地域のボランティア、島民の皆様の協力のもと作業を行っている。

他機関との連携状況

高見島の島民の皆様、多度津町、香川県、多度津高校、地域のボランティア、京都精華大学、アートフロントギャラリー

活動の効果

空き家4件を展示会場として整備補修することができた。草に覆われ損傷が激しい状態であったが、葛草の撤去、余分な木の伐採、崩れた壁や納屋、瓦礫の撤去を行い2022年芸術祭の展示会場として「浦集落・フジタ邸」「浦集落・イシダ邸」を使用する。「浦集落・ナカムラ邸」は、2階をミュージアムショップに改装し、「浦集落・スミダ邸」は参加作家が使える宿舎として整えた。

活動の独自性

高見島を人々の集まる美術館のような場所にするためには、島独自の景観を残し地域性を活かすことが大切である。高見島には地形に沿った坂道、続く石垣、多くの古民家が連なり、残すべき景色がある。他の芸術祭参加地域に比べて群を抜いて過疎化が進む限界集落だからこそ、残された景色だと感じられる。

高見島プロジェクトは、3回の芸術祭を経験し、合計9軒の空き家を補修し整備してきた。町並みや作品は、高見島を支えるボランティアによって環境整備が定期的に行われてきた。これまでの活動で得た空き家補修のノウハウと、住人やボランティアとの協力体制を築いている。

郷土料理である「茶粥」「醤油豆」や町並みなどの地域の魅力と、芸術作品によって人が集まる場所作りを行う。

総括

高見島プロジェクトは最初に芸術祭に参加した2013年から継続して島と関わり、2022年で4回目の会期を迎える。高見島は芸術祭に関わる島の中で最も過疎化が進む地域であり、島民の数も当初30人だったのが、今では一桁に進むほどスピードを速めている。島民に景観を保存する余力は無く、島に古くから残る石垣、塩飽大工が建てたであろう100年を超える民家による街並みを、どのようにアピールし保存していくかが重要となる。芸術祭では空き家を利用した作品を展開し、ボランティアと協力しながら島を盛り上げてきたが、この数年で空き家群が次々と倒壊している。今回この地域振興助成金により、これまでの崩壊を止める活動から、きちんとした家の修理、ミュージアムショップの開設を行うことができた。これは芸術祭が行われる年だけ島に関わるこれまでの活動方法を考え直し、コンスタントに人が訪れる場所を目指す私たちの活動にとって大きな一歩となった。この先の課題として、継続したプロジェクトにしていくためのショップを活用した資金面での工夫に加え、組織構造の透明化や見直し、ハラスメント防止活動、安全性の見直しなど、地域住民やボランティア、大学機関とも連携しながら進めたい。



公益財団法人福武財団

地域振興助成

2021年度アートによる地域振興助成
成果報告書

Fukutake Foundation

事業名	アジアローカルクロッシング：海とともに生きる		
団体名	遠足プロジェクト実行委員会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	武谷 大介	活動地域（都道府県名）	宮城県 詳細エリア 気仙沼市、石巻市

活動の目的

- 海外アーティスト・技能実習生・地域住民らの三者協働のアート実践と現地サポート体制の構築：コロナの影響でインバウンド推進が大打撃を受けている石巻市・気仙沼市における多文化共生のあり方を、オンラインで地域団体と連携して行う。
- 多文化共生社会実現に向けた住民と技能実習生らの相互理解の促進：住民と技能実習生が食やアートを通して交流することで、「外国人」ではなく、顔の見える個人同士の関係性を育む。また、気仙沼、石巻のプログラム参加者同士の定期ミーティングや、SNS上の交流を通して、両地域に共通する課題について理解を深める。

活動の内容

コロナの影響を受けて当初予定していた街歩きやワークショップを参加者限定で開催。また、海外作家の来日が叶わなかったため、地域のローカルな人材と海外アーティストのオンライン参加の折衷案を実践した。（2021年7月16日～8月1日）

気仙沼／リアス・アーク美術館市民スペース、ピアセブンでの展覧会開催。気仙沼インドネシアフェスティバル参加＋内湾での撮影会開催。技能実習生らと交流し出船（船が出航する際の見送り行事）参加、地域文化を再発掘し大漁看板（船主が船員に贈る着物）Tシャツ制作。

石巻／障害者美術館く・ら・らでの展覧会開催、バルコキノシタワークショップ、関係者座談会、アート街歩きにてリボンアート・フェスティバル会場や市内アートスペースをまち歩き。DAIS石巻（団体活動拠点）整備開始。

参加作家、参加人数

気仙沼／レオナルド・バルトロメロス、ワンジット・フィルマンティカ、齊藤道有、前田晃壽（第81大喜丸）、インドネシア技能実習生、他市民のみなさん。1,524人（オンライン視聴1,264回）

石巻／バルコキノシタ、石巻劇場芸術協会、黒田龍夫（石巻祥心会）、清水孝夫（国際サークル友好21）、市内障害者施設のみなさん、他市民のみなさん。311人

他機関との連携状況

気仙沼市教育委員会、リアス・アーク美術館、気仙沼まち・ひと・しごと交流プラザ、第81大喜丸、石巻市教育委員会、リボンアート・フェスティバル、石巻祥心会、国際サークル友好21、石巻劇芸術協会

活動の効果

コロナ禍の厳しい状況下での地域住民、移民や技能実習生、障害者などのマイノリティコミュニティとのリアルと、オンライン折衷の新たな協働の視座を示す事ができた。行政主導プロジェクトでは見えづらい、個人の声を拾う事ができた。ポストコロナ時代のトランスナショナル・アートプロジェクトの重要性を痛感し、継続や成果、集客数のみを重んじるアートプロジェクトの危うさを認識できた。今後のDAIS石巻（団体の活動拠点）での実践の道筋が描けた。

活動の独自性

我々は、コロナ禍の影響で大きく縮小されてきた国内インバウンド事業の間違いに気がつかなければならないが、現在のような状況下でも臨機応変に対応し、多文化共生・協働を実践している。遠足プロジェクトの約10年間の活動の国際ネットワーク形成の経験を地域市民に還元し、継続ありきではない循環する新たなトランスナショナルな循環系が構築されつつある（あえて言うならば10年後でもさ・れ・つ・つ・あ・る、である）。遠足プロジェクトの新拠点であるDAIS石巻は、美術館機能を持った市民目線での伝承館準備室であり、ポリフォニーの実践・循環系はすでに始まっている。

総括

報告書のリアス・アーク美術館館長山内宏泰氏と美術評論家市原研太郎氏のコメントが本事業をよく言い当てている。遠足プロジェクトが掲げる「当事者として共に背負う」とは、一体どういう事なのか、本事業の実践で学ぶ事は少なくなかった。山内氏の指摘する20世紀型的美術館が「誘導して理解を促す」モデルは、コロナ禍、またはポストコロナ時代の21世紀アートには適していないように感じられた。コロナ禍の影響でプロジェクト開始後に大きな変更があったが、それらの状況への対応は、「アンラーニング」であり、「リスタート」、の連続であった。自らの足でまちを歩き、そして感じることから始める。遠足プロジェクトが被災地と被災者と共にある事に、開始当初から変化はない。本事業が求めてきた「循環系の構築」とは、アーティスト、地域住民、我々実行委員会のメンバーも含めて参加する全ての人たち、すなわちプレイヤーとなる人全てが「主役」となる場であるからこそ成り立つものである。アーティストやキュレーターがお膳立てしたものを享受してもらうのではなく、「共に学び背負う」継続したプロセスそのものがアートなのである。



出航する前の「出船（でふね）」送りに参加



気仙沼の玄関口では約120点の作品を展示
写真 Michiani Saito



ランドセル作品を背負い作品を観て回った
写真 Mayumi Yamada

事業名	イミグレーション・ミュージアム・東京 多国籍美術展「わたしたちはみえているー日本に暮らす海外ルーツのひとー」		
団体名	特定非営利活動法人音まち計画	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	岡部 修二	活動地域(都道府県名)	東京都 詳細エリア 足立区

活動の目的

美術家の岩井成昭が主宰する「イミグレーション・ミュージアム・東京」(通称:IMM東京)は、2011年から地域に居住する海外ルーツの方々との交流を通して企画されるアートプロジェクト。地域に暮らす彼/彼女たちの生活様式や文化背景を紹介するとともに、それが日常の中で変容していく諸相を「適応」「保持」「融合」という3つのキーワードから探る。これまでの活動の蓄積をもとに、足立区という多国籍化の進む都心地域から「多文化社会」を多角的に問い直すとともに、本プロジェクトを通して、多文化社会を「知り」、多文化社会を「考え」、多文化社会に「参画」していくプラットフォームとしていくことで、足立区が多文化化について考えていく第一歩となることを目指す。

活動の内容

多国籍化の進む足立区から、海外ルーツのひとびとに着目した展覧会を開催(2021年12月11日～26日)。多文化社会を知り、考え、参画していくプラットフォームとして、多文化社会をテーマとした①ゲスト&ホストアーティストの展示、②日本に暮らす海外にルーツを持つ方々の公募展、③アートを積極的に取り入れる多文化共生に取り組む国内の活動団体の紹介を行った。また、展覧会に合わせて、区内の小学校4校を対象に多文化社会の現状に気づき、理解を深めるアートワークショップや展覧会会場に展示された作品を扱った対話型鑑賞ツアーを実施。トークイベントも4つ開催。また、市民チーム「IMMねいばーず」とともにリサーチや勉強会なども通年で実施した。展覧会の会場では、リサーチから食をテーマとした来場者が思い出の味を交換しあう「多文化リサーチプロジェクト」を企画した。

参加作家、参加人数

本企画には主宰である岩井成昭(美術家)を筆頭にゲストアーティストとして岩根愛(写真家)、高山明(アーティスト・演出家)、李晶玉(美術家)が参加。そのほか、合計84名、14団体関わった。また展覧会やトーク、アウトリーチプログラムなど合わせて延べ2,205名の方が参加・来場した。

他機関との連携状況

足立区シティプロモーション課/アウトリーチ校への打診協力及び広報協力。アーツカウンシル東京/広報、運営協力。

活動の効果

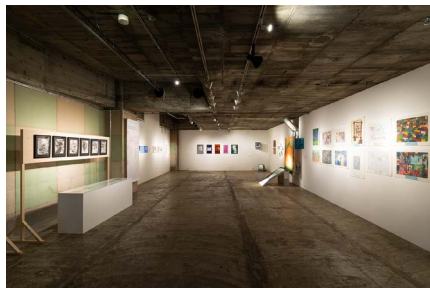
複数の新聞社や芸術関連の媒体、美術批評家、多文化社会に関心を持つ個人や団体のSNS等で反響が広がり多くの方々に来場した。また、「あだち広報」にも掲載され、会場周辺にお住まいの地域の方々や小学生、海外ルーツを持つ方々へアプローチでき、日本が抱える「内なる国際化」の現状を知ってもらう機会となった。

活動の独自性

日本社会が抱える喫緊の課題として多文化社会をテーマとした活動や展覧会は近年増えているものの、それらをつなぐプラットフォームはあまり見られない。また海外にルーツを持つ方々の作品公募展も東京都小金井市など自治体等がその行政区域の住民を対象としたものはあるが、国内全域を対象としたものは見られない。本展は、それらをつなぐプラットフォームとして企画されている。

総括

会期中、「アウトリーチ&鑑賞ツアープログラム」に参加した子どもたちが学校帰りに立ち寄り、作品を前に語り合う様子が頻繁に見られた。本展が作品発表の場としての意味だけでなく、子どもたちが自主的に会場に足を運び、海外ルーツの方々の生活や思いを遊びながら学ぶ場として機能したことは、未来につながる重要な成果のひとつであった。また、実施後に行った各校の担任教諭へのヒアリングでは「アートを通して世界中の人と交流し親睦を深めるというのは、国際理解において重要なことであると再認識しました」、「今回の対話鑑賞の体験を通じて、より生徒たちのことを知ることができ、成長した姿をみられて誇らしい気持ちです」という意見が得られ、今後の多文化社会を考えていく際に、教育機関の方々に影響があったことは次の展開へと繋がる兆しとなる。



北千住BUoY3F公募展の様子
写真 福田了平



李晶玉氏の作品で対話型鑑賞している様子



Sepideh Hashemi講師のワークショップ

事業名	鉄工島 LIVE 2021		
団体名	鉄工島 FES 実行委員会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	須田 眞輝	活動地域(都道府県名)	東京都 詳細エリア 大田区京浜島

活動の目的

「鉄工島FES」では、京浜工業地帯の豊かな技術と歴史を再発見し、その環境と、そこで働く人々とアーティスト達とのコラボレーションを生みだし、新しい時代の表現を生みだしていくことを目的としている。

活動の内容

コロナのため緊急事態宣言が延長されていることも鑑み、「場踊り、場叩き」のライブとしての開催は、一般客(2500円で20名予定)ゲスト含めて50名ほどに限定しておこなった(2021年9月23日)。

一方、ライブの様子は、映像作家さわひらきと、写真家 鈴木雄介の撮影・編集で映像作品として完成させた。

参加作家、参加人数

出演者/田中泯、中村達也

映像/さわひらき、鈴木雄介

衣装/YANTOR

参加人数/PEATIXで購入したのは20名、ゲスト含めて約50名

他機関との連携状況

主催にアイランドジャパン株式会社(スポンサー)、制作・運営にはロケットペンシル株式会社が入った。

活動の効果

田中泯さんと須田鉄工所の須田さんや実行委員副代表の尾針さんと、密なコミュニケーションができた。尾針さんは、田中泯さんの踊りの振動を体で感じながら、鉄工所の誇りを取り戻したと涙を流していた。このライブのためにはじめて京浜島にきたお客様も満足され、充実した機会となった。

活動の独自性

「錆をまといたい」とおっしゃった田中泯さんのイメージに近づけるべく、衣装のYANTORや、撮影・編集のさわひらきさん、鈴木さんとも事前にミーティングを行い、どのように世界観を近づけるか十分に検討の上ライブに挑んだ結果、クオリティの高い映像を残すことができたと思う。

「場踊り・場叩き」はこれまで、劇場や神社の舞台などで行われてきたが、現役の鉄工所で行われたのははじめてのことだ。

総括

今まで、鉄工島FESは、いわゆる「フェス」という形で、さまざまなプログラムを、鉄工所のエリア一体で、そこかしこで行われるという形で実施してきた。コロナの影響で、2019年は中止となったが、せっかくスタートした「鉄工島FES」の灯をたやしたくないという気持ちで、何か一つのプログラムだけをできるとしたら、そしてその一つのプログラムだけでも、全体に匹敵するような強度のあるものができないだろうか、と考えて、今回行うことにしたのが「場踊り・場叩き」である。

田中泯さんは「場」の空気をまとい、即興でおどる。これまでたくさんの場所で「場踊り」をしてきた田中泯さんに、「鉄工所」が魅力的に映るか、泯さんを迎えるときはとても緊張したが、一目見るなり、泯さんの厳しい顔がほころんだ。実は泯さんは大田区で生まれ、錆や鉄を身近に感じながら育ったこと、鉄工所で一時期アルバイトもしていたことを知った。須田鉄工所の須田さんは、同じ場所で育った思い出をとてもなつかしく、感じ、二人はすぐに意気投合した。

中村達也さんの「場叩き」も、鉄工所全体が一つの体となり、内側から鳴り響くような凄まじいものになり、中村さん、田中泯さんの呼吸と、信頼が、この地を鼓舞し、讃えるものになったのは、参加したみなさまにも伝わったと思う。この空気をどう伝えるか、映像化におよそ1年費やすこととなったが、さわひらきさんのおかげでまとまり、ようやく出演者のOKをいただくことができた。この出来事を伝えていきたい。



鉄工島LIVE 2021
写真 石原淋



鉄工島LIVE 2021
写真 石原淋



鉄工島LIVE 2021
写真 石原淋

事業名	鎌倉 ○○ アカデミア (かまくら まるまる アカデミア)		
団体名	ルートカルチャー	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	瀬藤 康嗣	活動地域(都道府県名)	神奈川県 鎌倉市

活動の目的

地域に存在する「自然／文化」「新／古」「老／若」などの差異の狭間に架け橋を渡し、多様性を包みこむ文化的プラットフォームを作ること。
 具体的には(1)文化的「土壌」を知る：地域の文化的資源を掘り下げ、ローカル同士の交流や対話を行う (2)実際の「土壌」を育てる：人が幸福に生きるために必要不可欠な野菜やハーブを育てるための健全な土作りと栽培を行いながら、人と自然のより良い関係性を育む文化的実践を行う (3)種を蒔く：地域内外の団体やアーティストと交流しながら、自分たちの活動から生まれたモノを拡げて行く という方法の有効性を検証すること。

活動の内容

R&Dと交流の拠点としてR∞∞T Lab.を開設し、オープンラボ・ワークショップ・トークイベント等を開催。

- 「隣人に聞いてみたい23の質問」(以下「23Q」/地域に住む老若男女へのインタビュー動画企画(YouTube))。
- プレシャスプラスチック鎌倉/地域内で出たプラスチックごみの地域内循環を目指すプロジェクト。2名のプロダクトデザイナーと協働し、廃プラスチックを用いてプロダクト開発し、成果発表と他団体との情報交換。
- R&Dの成果として、植物や発酵食品の生体電位から音楽を生成するデバイス「NOW HEAR MACHINE」開発、デバイスをを用いた作品制作、デバイスづくりのためのワークショップ開催。
- 成果のアウトリーチ
Apple Phonics、パペットワークショップ、R∞∞T Lab the Movie、ART & OBJECT MARKET、ココ絶対世界など地域内外において、R∞∞T Lab.の活動成果を発表。

参加作家、参加人数

参加作家(順不同)/テリー・ライリー、有山葉子(Yo-yo.)、上田麻希、Shu Kojima、ヨシハラケイタ、伊藤桂司、Yah-ya、Yada、三浦秀彦、大友敏弘、勝見淳平、マイケル・フランク、瀬藤康嗣
 参加人数/オープンラボ参加200名、ワークショップ参加100名、上映会参加30名、アウトリーチイベント参加者約1,000名、YouTube動画再生回数(21年4月～22年5月)/約45,000回

他機関との連携状況

FabLab Kamakura、鎌倉市政策創造課、株式会社エンジョイハウス、面白法人カヤック、ゴミフェス532、田中浩也(慶應義塾大学)、鎌倉FM、タウンニュース鎌倉版。
 竹鳥(鎌倉)、株式会社純粋(逗子)、GRGR Gallery(伊豆)、たべるとくらしの研究所(福島/北海道)

活動の効果

動画企画「23Q」は朝日新聞で紹介され、プレシャスプラスチック鎌倉も、多くのコラボレーターを巻き込みながら活動を展開した。
 R∞∞T Lab.でのR&Dから作られた「NOW HEAR MACHINE」は、テリー・ライリー氏が音楽制作に取り入れるなど広がりを見せ、関連のワークショップと作品展示が青森、福島、山梨、東京で予定されている。他にも、参加型のパペットづくりワークショップがきっかけとなり「Puppet Disco」というプロジェクトが生まれた。

活動の独自性

作品制作の観点：「NOW HEAR MACHINE」と野菜・盆栽・発酵食品そのものをインターフェイスとして用いた、電子楽器やスピーカー、りんごの樹木本体が楽器/ヘッドフォンとなる「Apple Phone」のようなユニークな作品を制作した。現在多くの企画への招聘が予定されているのは、その独自性への評価のあらわれである。
 プラットフォームの観点：地域外から著名なアーティストを招聘して活動を行う芸術祭が多いのに対し、私達の活動は、自分たちが中心となって地域内外のアーティスト/クリエイターを巻き込みながら「一緒につくるコミュニティ」の形成を志向しており、他に類例を見ない独自の活動であると自負している。

総括

「プレシャスプラスチック鎌倉」の活動は、海洋プラスチックゴミ問題・循環型社会の実現という、地域内外で多くの人が関心ある課題解決に関わるため、活動を通じて多くの団体やクリエイターとの交流が生まれた。22年春からは、慶應義塾大学「デジタル駆動超資源循環参加型社会」(プロジェクトリーダー：田中浩也教授)のサテライト研究拠点が鎌倉で活動を開始し、私たちもこの研究活動に微力ながら協力する予定である。
 「NOW HEAR MACHINE」はアーティストだけでなく、料理研究家や園芸家にも驚きと喜びをもって受け入れられている。このデバイスは、基本的に販売は行わずDIYで制作するワークショップを通じて拡げており、これが私たちの活動のコミュニティ形成に一役買っている。世界的な音楽家テリー・ライリー氏との関係もこのデバイスが縁となって出来たものであり、氏とのこれからのコラボレーションにおいても重要な役割を果たすこととなる。
 このように、今後に繋がる活動の「土壌」育成と「種まき」をすることができた、充実の1年であった。



隣人に聞いてみたい23の質問



テリー・ライリー氏と共に音楽とパン作り



プレシャスプラスチック鎌倉トークイベント

事業名 崇仁すくすくセンタープロジェクト			
団体名	山本 麻紀子(個人)	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	山本 麻紀子	活動地域(都道府県名)	京都府
		詳細エリア	京都市下京区崇仁地域

活動の目的

崇仁地域において、京都市立芸術大学(以下「京都芸大」)移転などの新しいまちづくりによって、地域の歴史や人々の記憶、思い出の分断や消失が危惧されており、それらの継承を担うことができないかという思いを発端にプロジェクトを立ち上げた。移転予定地である元小学校、元市営住宅、元保育所などで生きていた樹木の挿し木を試み、それらを媒介として、地域の方々とともに成長を見守りながらお話しや作品制作を重ねることで、土地の記憶や物語、人との繋がりを継承していくことを目指している。挿し木が十分に成長した際に、崇仁地域やその他ご縁のできた場所へ地植えすることを目標に2030年までを念頭に計画をたてている。

活動の内容

- 崇仁デイサービスうおいの利用者・職員の方との活動
具体的には、プロジェクト紹介と植物の世界に触れていただくワークショップ、挿し木を囲んでおはなしや絵を描く会、色和紙づくり、色和紙を使って挿し木のちぎり絵を制作した。また、デイサービスフロア内で挿し木の見守りをお願いし、成長記録日誌作成や挿し木に触れていただきながらのおはなしの聞き取りも行った。
- 山本麻紀子による個人リサーチ
今後、年1回崇仁の屋外で開催を予定している「挿し木鑑賞会」の際の場の設え、ワークショップで行う作品制作おける素材や技法など探る実践として、主に「植物染め」と「焼き物(土)」をテーマにリサーチを行った。
- 活動報告展の開催
上記2つの取組みを紹介する報告展を開催した(2022年2月14日～2月20日)。

参加作家、参加人数

デイサービスうおいでのワークショップや挿し木の見守り日誌記録など(利用者と職員方)/約30名
地域連携などのアドバイザー/5名
展覧会入場者数/約130名

他機関との連携状況

崇仁自治連合会から、今後の展開について様々な意見をいただいている。崇仁発信実行委員会が発行している「崇仁～ひと・まち・れきし」「崇仁小学校の思い出冊子」にて本取組について掲載していただく予定。2022年度は、児童館、崇仁地域の手芸サークルの方々、京都芸大の学生などと作品制作を進める。

活動の効果

崇仁デイサービスうおいと協働でプロジェクトを進めさせていただけたので、高齢者の方々の意見や思いをより深く伺うことができ、施設とともに一体となって活動を進めることができた。今後毎年継続して行っていく作品制作のためのリサーチ(素材・技法を探る)を充実させることができた。展覧会を開催できたことで、地域住民とのつながり、地域外からの関心、新聞記者やメディア関係の方々、今後継続して関係を育んでいく基盤づくりができた。年間記録集を幅広くお渡しすることができた。

活動の独自性

うおいの利用者の皆さんからのおはなしの聞き取りでは、実際に挿し木に触れていただいたり、その挿し木の元の姿や、樹木が生きていた場所の写真を見ていただきながら丁寧に話を聞き取ったため、より鮮明に昔の風景やその時の感情などを思い出していただけた。認定症予防などの福祉面での効果もあった。
植物の成長を見守る長期プロジェクトのため、大きなビジョンを持ちつつも一年毎にじっくりと計画をたてる中で出てきた様々な疑問点を、地域で活動している他団体の方や行政、また樹木医やHAPS(東山アーティスト・プレイメント・サービス)から意見やアドバイスをいただくことで、より包括的な連携体制をつくることのできる。
現在、崇仁地域と同じような課題に直面している地域の方々、「挿し木」をきっかけにして、交流や協力体制を育みながら、地域を超えた活動へと発展させることができる。

総括

2021年度よりプロジェクトを自走させるにあたり、共生・協働・信愛を行動規範に地域で長年活動している社会福祉法人の職員、地域拠点や新しい福祉の場などの設計を通じ、「コミュニティの見える場面づくり」に取り組む設計事務所の建築士、京都市の文化芸術政策の担当職員とともに実行委員会を立ちあげた。また、樹木の専門家から技術的なアドバイス、HAPSからは地域連携・アートプロジェクトに関するアドバイスやイベント告知の協力など様々なサポートをいただいた。大がかりなまちづくりにより、地域の景色が急激に変わっていく中、またコロナ状況下で普段より外に出る機会が少なくなり、人との接点も減った高齢者の皆さんと日頃から寄り添う福祉施設の職員と協働でプロジェクトを進めることで、地域で長く暮らしてこられた利用者の方が、できる限り主体的に作品制作や発表に関わっていただけるよう注力した。施設職員の方より、報告展で展示した作品を見て、利用者の個性がそのまま手を通して表れ、それらが集まった時に非常に魅力的な作品になるという気づきがあり、介護現場における職員の意識を少しずつ変える契機になったという意見もいただき、一方的ではなく相互作用のある組織体制が創り出せたように思う。



デイサービスでの挿し木の見守り風景



デイサービス利用者によるちぎり絵制作



崇仁すくすくセンター活動報告展
写真 内堀義之

事業名	KUMANO		
団体名	一般社団法人マルタス	実施期間	2021年10月27日・28日
代表者名	眞田 大輔	活動地域(都道府県名)	和歌山県 詳細エリア 新宮市

活動の目的

オランダと日本を拠点に世界で活動するピアニスト・アーティスト・ディレクターの向井山朋子は、生まれ故郷の新宮市に新たに文化施設が建設されることを知り、熊野古道がかつて巡礼者たちの情報交換、交易の“場”であったように、新宮が文化の交流、交差、発信する土地とならんことを目的とし、2019年地元有志メンバーと共に「ここから実行委員会」を立ち上げた。組織の名前通り“ここから”、新宮市から世界に発信するアートを掲げ、2021年度は、熊野で撮影した映像とピアノ音楽を軸にインターディシプリナ「KUMANO」と題した舞台作品を、新宮市の新たな文化発信施設オープンを記念するコンサートとして、地域在住市民と協働しながら制作した。

活動の内容

現実と非現実、身体と精神、神聖と穢れが混沌と共存するこの土地からインスピレーションを得て、向井山朋子がオランダを代表する映画人レニエ・ファン・ブルムレンと協働し、熊野で撮影した映像、ピアノ楽曲と自然音と電子音が交差する音世界、リアルタイムのコンサートと映像の投影を重ねる方法で、現実と架空のあわいの視覚化を試みた。ジェンダー、生と死が通奏低音となり、向井山の幼少の頃の記憶を映像で追体験しながら、極私的な視点で熊野の世界を再構築した。創作リハーサルと映像撮影は熊野市、新宮市にて行われ、発表は新宮市の新たな文化発信施設「丹鶴ホール」オープンを記念するコンサートとして2021年10月27日・28日の2日間開催された。

参加作家、参加人数

映像・インスタレーション・照明／向井山朋子、レニエ・ファン・ブルムレン、ピアノ／向井山朋子、いけばな／片桐功敦、テクニカルディレクター／遠藤豊(LUFTZUG)他、プロジェクト参加キャスト・スタッフ人数合計54名、有料来場者720名(全2回公演)

他機関との連携状況

ここから実行委員会(創作稽古準備、公演運営、広報活動の連携)、新宮市(市役所、市民、行政関係者との連携)、オランダ大使館(感染症により海外渡航が厳しい時期における入国までのサポート調整、広報協力)

活動の効果

中高生から高齢者まで幅広い地域住民への刺激、新たな価値観の提示となった。また結果として、地元では珍しい複合アート芸術による上演形態であったため、新施設の利用事例の提案にもなった。ワークショップを経た地元の小学生が舞台出演するシーンもあり、新施設での舞台出演は大変刺激になった。当初の目標を大きく上回る有料来場720名の動員結果となった。新宮周辺市民のほか、新宮熊野の観光を兼ねた関東関西など遠方からの来場者も含む。2022年度はオランダにて再演ツアーも予定されている。

活動の独自性

劇場や専門機関スタッフではない、地域の実業家、様々な職種の仕事人、主婦などによる20数人の地域住民からなる地元実行委員会との協業による運営、広報活動と、その過程。特に広報チケット販売活動においては、対面人づての口コミによる拡散宣伝、ポスター掲示、稽古期間中の住民との交流による認知など、人と人との生の交流による成果が大きかった。また県外からの来場者に向けては、椿の花を主体にデザインしたポスターを、新宮市の海辺の風景や歴史遺産、街なみを背景に写真撮影し、SNSで数々のフォトジェニックなビジュアルを発信した。この展開は、地域住民ならではの土地勘やセンスが活かされ、また手作り感もあり、県外からの来場者から好評であった。この経験を活かし、ポストコロナの時代に協働企画を継続し、新たに国際化する術を探ることが今後の課題。

総括

和歌山新宮発、日本とオランダの国際共同プログラムという観点では、スタッフの入国来日のVISA発行を含む可否や隔離期間との関連で、まずは無事本番公演を予定の演出内容で実施できるかが課題であったが、幸運にも和歌山県内における創作リハーサル日程を削ることなく実行できた。人口も感染者も少ない地域における海外スタッフを含めての一同滞在という事もありデリケートな時期ではあったが、720名(有料入場者)を迎えた当日会場運営を含め、感染症拡大の問題なくスムーズにイベントを開催できた。上演した新作は、演出手法的には多くの地域住民には見慣れない先鋭的なものと捉えられたが、冒頭の導入部分に和歌山県立博物館蔵の「熊野観心十界曼荼羅」図をメイン映像として使用するなど、地域の中高年層観客が集中導入しやすい要素もあったと見受けられた。地元で音楽活動をしている若者からは、高度な映像技術をつかった演出や照明効果などが今後の部活動やコンクール、公演活動の参考になったと反響があった。感染症により人と人との生の交流が希薄になっている期間において、上記(活動の独自性)で触れたとおり、地域コミュニティ内のまちづくり活性化の刺激の一助となる公演となった。



舞台公演本番



新宮市の風景を活かしたSNS広報活動



舞台出演前にした小学生ワークショップ

事業名	たつのアートシーン 2021		
団体名	NPO法人ひとまちあーと	実施期間	2021年11月3日～11月29日
代表者名	畑本 康介	活動地域(都道府県名)	兵庫県 詳細エリア たつの市重要伝統的建造物群保存地区

活動の目的

2011年から始まった「龍野アートプロジェクト」を引き継ぎ、地域に残る文化財を活用し優れた芸術を国内外に発信する。また、同じく龍野では「オータムフェスティバルin龍野」や「龍野劇場プロジェクト」などアートの要素を含む地域イベントが各種団体によって開催されてきた。現状、個々での活動になっているが団体間の連携を深め、広報活動における全体的、包括的な体制をより強固なものにし、ただ観光客を誘致するというのではなく、歴史ある城下町龍野での地元住民とともに歩み持続可能なアート発信の場を育むことが目的である。

活動の内容

「たつのアートシーン2021」と題し、大きく分けて3つの活動を実施した。

- 龍野国際映像祭2021
たつのに縁のある映像作家宮嶋龍太郎氏監修の国際映像祭。約ひと月に渡り佳作作品をたつの市内の6箇所で開催。ノミネート作品を「の劇場」にて上映し受賞作品を決定。本イベントの為に作成された「野見宿禰」「樽の唄」、招聘作品・山村浩二監督「幾多の北」を上映。
- 山展
「山」をテーマとして、城下町後背の鶏籠山や台山あるいは白鷺山公園などを背景としながら、自然と人間との関わりについて考え、また山の持つ神秘的な魅力の源を探ることをコンセプトに展覧会を開催。歴史文化資料館館長を招いての山を題材としたトークセッションや、ガイドツアー、アーティストトークも行った。
- 龍野舞台芸術／「の劇場」をメインに5会場にて6演目を実施。(トークセッション、演劇、能舞台、ライブ、コンサート、人形芝居)

参加作家、参加人数

龍野国際映像祭：作品応募数3,350作品／国と地域117カ国、延べ入場者9,386人 山展：ダニエル・コニウシュ／宮嶋龍太郎／アグニェシュカ・ポルスカ／山下耕平／ベアタ・ズバ、延べ入場者4,123人 龍野舞台芸術：陽介(芸術監督)／菟田翔一(作曲家)／多田周子(歌手)／小倉ヒラク(発酵デザイナー)／劇団「安住の地」／能楽団体「瓦照苑」／人形芝居えびす座／Jusqu'à Grand-Père他、期間中の来街者数は延べ80,000人にのぼった。

他機関との連携状況

たつの市、Kiss FM KOBE、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会、東京藝術大学「I LOVE YOU」プロジェクト、ポーランド広報文化センター、西日本旅客鉄道株式会社、一般社団法人北前船交流拡大機構、朝日新聞社、等 協賛：14団体、助成：4団体、協力：10団体、後援：13団体

活動の効果

「の劇場」を中心に6箇所の施設を会場にすることで、地域住民と協働して開催し、来街者は各会場を歩いて巡るなかで城下町を堪能し、地域に根付いた文化、芸術を発信できる仕組みづくりができた。他のイベント団体との連携をはかり共に広報活動の相乗効果を得ることができ、たつのにける秋の芸術祭の共通プラットフォームとなりうる活動となった。次年度へ、さらに様々な公共団体や企業、住民団体と連携体制を取りながら、持続可能な運営に繋がる活動となった。

活動の独自性

2019年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された、たつのにの城下町を中心に開催。『播磨風土記』に相撲の神様と称えられる「野見宿禰(のみのすくね)」を題材にアニメーション作家宮嶋氏による作品の制作や、たつのにの出身の作家三木露風の「樽の唄」を映像作家高木氏により映像化し、上映。明治時代に作られたと言われる元醬油蔵の「の劇場」をメイン会場とし、龍野城下町を中心に残る醸造文化、文化財を守りつつ活用し、アーティストと協働することで、新たな芸術の創造、発信を試み続ける。また、行政主導ではなく、地元NPOが主体で運営し、昔から地域に根付いて活動してきたアートの要素を含む諸団体や地域を応援する企業と連携しながら、運営体制を構築する。

総括

2021年11月3日に行われたオープニングイベントには、行政、地域の企業・住民・店舗経営者や作家、公共団体、財団等、さまざまな方々に集まっていた。これまで諸先輩方が培ってきた、龍野の芸術文化発信の場を繋げ、今後さらに広げていく可能性をみる事ができた。龍野国際映像祭として映像からの芸術発信、山展と題し国内外で活躍するアーティストとたつのにの有する歴史ある施設の融合、龍野舞台芸術として、発酵をテーマとしたアーティストトーク、元醬油蔵での現代劇や能舞台公演、たつのにの出身の作曲家によるコンサート等、多角的アプローチで参加者に働きかけることで、たつのにの有する可能性を現状できる限り発信した。初年度として、たつのにを中心とした芸術文化発信のプラットフォームとしては基盤創りにとどまり、これから更に活動を深めていくなかで仲間を作り賛同者を増やすことが必要不可欠であり、それにより活動の広がりや奥行きを追求していく。2022年は、たつのにの地域にとどまらず西播磨の各地域と連携し、年間を通じ多彩な芸術文化活動を盛り上げ発信していく。



開会式典での「樽の唄」上映の様子
© たつのにアートシーン実行委員会/撮影 宰井琢磨



会場の一つ「ガレリア アーツ & ティー」風景
写真 宮嶋龍太郎



菟田翔一作曲コンサートの様子
© たつのにアートシーン実行委員会/撮影 宰井琢磨

事業名	Artist on the Sea project in Sakaide		
団体名	瀬戸内国際芸術祭坂出市実行委員会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	有福 哲二	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 坂出市

活動の目的

海は、まるで生き物のように変化している。しかし、護岸工事をすることで海岸線は変わらなくなった。潮の流れの変化というメッセージを我々は感じる事ができなくなり、海との関係から決別していつているようにも思える。これまでに積み上げられてきた海の文化は、先人たちが境界線をしなやかに縫いながら生きてきた証である。瀬居島の海とともに暮らす人々にこの術を学びながら、アーティストが翻訳者となって作品を制作する。このアートプロジェクトを通して「海に対する身体性」を再び取り戻し、境界線について考えることを目的とする。

活動の内容

- 1 アーティストの制作工房とレジデンスを充実させた。
- 2 「瀬戸内芸術祭2019」に参加以降、坂出市で滞在制作を続けているYottaが、街のリサーチを重ね、海にまつわる作品を制作した。長年使われていなかった船を使用した作品で、実際に走行できる状態まで持っていくことができ、沙弥島までクルージングを行った。
- 3 与島五島を巡るために与島の漁業組合と協議をし、各島の漁港に寄港する許可をいただいた(但し、新型コロナウイルスの影響で、島への渡航を年度内に行うことはできなかった)。
- 4 与島五島の自治会長と協議をし、Yottaの作品でこれから何ができるかなど話し合いを行った。
- 5 御供所港の漁師さんへ船に関するリサーチを行った。
- 6 「Artist on the Sea in Sakaide」のウェブサイトを作成し、オンラインでの情報発信を開始した。
- 7 文筆家の三木学さん、アーティストの栗林隆さんと、オンライントークを実施した(2022年3月26日・27日)。

参加作家、参加人数

参加作家/Yotta
 オンライントークゲスト/三木学氏、栗林隆氏

他機関との連携状況

坂出市、与島五島自治会、与島漁港

活動の効果

今回の活動で、今までアートに関心のなかった方にも情報を周知できた。また、芸術祭に否定的な方にも、耳を傾けていただけるような状況ができていた。これまでは、望んでも作家と関わる機会が芸術祭の作品制作の手伝い以外あまりなかったと聞くが、レジデンスや作家滞在型の展示によって、現代美術や海の文化について気軽に話すことのできる場もできつつある。

活動の独自性

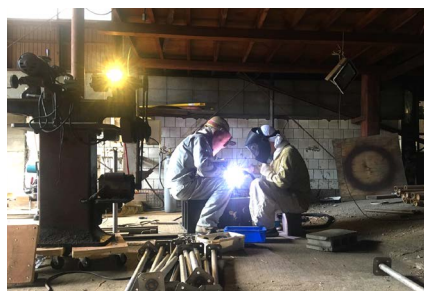
アーティストがレジデンスを作り、アーティストが企画運営をし、アーティストが行政に働きかけてプロジェクトを行うという点。今回のYottaの活動においては、常に動き続けているアートプロジェクトが公共の場所にある=関わろうと思えばいつでも関わることのできる場所に作品やアーティストがある(居る)という状況をつくることができた。また、コロナ禍のため、展示の場をウェブサイト上にも広げたことで、プロジェクトの進捗状況を発信でき、SNSでのコミュニケーションも可能となった。その他にも、理解されにくいアートに対して、継続的に親子参加のワークショップを行うことで、現代美術の作品を鑑賞するという体験とは異なる、作家の思考の追体験ができるような活動にも力を入れている。

総括

今年度は、コロナ禍で長期のまん延防止等重点措置や、緊急事態宣言がでていたため、人が集まる企画や、高齢者の多い閉じられた集落(島)を訪れることが思うようにできなかった。しかし、このような状況下でも、アーティストが制作などを通して街の人との繋がりを地道に作っていったことは次年度以降の活動に繋がる成果であったといえる。今回のYottaのプロジェクトについては、芸術祭などに前向きではない地域においても、身近な「船」の作品であったこともあり、快く受け入れてもらうことができた。そのため、当初からの目標でもある「アートで与島五島を結ぶ」ということが、少しずつではあるものの、実現可能であると行政も含め手応えを感じたように思われる。今年度、次のアーティストを招聘するための拠点となる工房・レジデンスの整備ができたが、このプロジェクトの立ち上げに際しては、客人(まれびと)としてのアーティストに対して、街の人はよく思っていないという意見もあった。こうした街の意見を尊重し、継続して坂出に関わり続けるアーティストを探すことに難しさも感じているが、引き続きこの地での活動を続けるYottaの次の展開と併せ、今年度築くことのできたネットワークや交流の場を活かし、引き続き地道な活動を続けていきたいと考えている。



ドックにて船を譲って下さった地元の方と



工房で地元の方に溶接を教わっているところ



栗林隆氏との
 オンライントークの様子

事業名	さどの島銀河芸術祭 2021		
団体名	一般社団法人佐渡国際芸術推進機構(さどの島銀河芸術祭実行委員会)	実施期間	2021年8月8日～10月3日
代表者名	吉田 盛之	活動地域(都道府県名)	新潟県
		詳細エリア	佐渡市

活動の目的

2021年は、アーティストが国家や地域、文化の違いを越え佐渡島に身を置き、離島という特異な文化や歴史の中で滞在し、地域の人々との交流を通して刺激やアイデア、インスピレーションを得て、新たな創作の糧としていく活動を進めることを行った。佐渡島で国際芸術祭を開催することによって、アーティストや地域の人々が、作品制作を通じ地域の魅力の向上、活性化を図ることはもちろん、新たな観光需要の掘り起こしや、魅力発信により来場者を増やすことで経済的効果を生み、地域の新たな仕事創出、インバウンド、二拠点生活や移住促進などアートを活かした地域の課題解決や価値創出につなげ、佐渡島から世界につながり、島を次世代に継承するのが活動の目的。

活動の内容

「さどの島銀河芸術祭2021」では、以下のプロジェクトを実施した。

- 1 アート・ツアープロジェクト／佐渡島内に多く残る民話や民俗文化、佐渡ジオパークなどを芸術の視点でリサーチを行い、芸術祭展示作品を含めたルートを造成し貸切バスで巡るツアーを行った。
- 2 作品制作・展示プロジェクト／国内外からアーティストや大学関係者を招聘し、リサーチをした後、土地に根ざした作品を地域住民と協働で制作・展示した。
- 3 SADMUNE(インターネット動画配信)プロジェクト／参加アーティストとの対談や、大学関係者や地域住民等と民俗学や自然・文化をアートの視点で訪ね歩き、テレビ放映や動画配信を行い情報発信につなげた。
- 4 シンポジウム・トークセッション／実行委員会メンバーや参加アーティスト、アドバイザー、大学関係者等と対談形式でシンポジウム・トークセッションを行い、これからの佐渡での芸術祭のあり方等について探った。
- 5 市民プロジェクト(さどポルテ)／市民の参加を促進するため、8月8日～12月31日の期間で、市民プロジェクトを公募、開催した。
- 6 佐渡の自然・文化を活用したキャンプフェスティバル(FRACTAL CAMP)／9月18日(土)～19日(日)テリー・ライリー、灰野敬二などが参加し、食・映像・音楽等を融合したキャンプフェスを開催した。
- 7 共生社会推進プロジェクト／障がいのある方と健常者とのより良い共生社会の推進を図るため「佐渡アール・ブリュット展」を開催したほか、歴史的建造物である能舞台で「手話狂言」を開催した。

参加作家、参加人数

Terry Riley(テリー・ライリー＝米国)、ホンマタカシ(日本)、ハ・ジョンナム(韓国)、椋岡かずお(日本)、山井隆介+長谷川億名(日本)、Kujun(日本)、梶井照隆(日本)、大輪龍志(日本)、できやよい(日本)、Ethan Estess(イーサン・エステス＝米国)等が参加し、参加人数は、20,490人だった。

他機関との連携状況

佐渡市、(一社)佐渡観光交流機構等、観光、宿泊事業者、複数大学機関、佐渡汽船(株)(船会社)、(株)スノーピーク、(株)日本旅行、JA 佐渡等と連携して事業を実施した。

活動の効果

芸術祭本祭の開催年となった本年度は、年間を通じアートプロジェクトとリサーチ、アートイベント等を進めてきた結果、島内外の人々との交流人口や関係人口の増加につながった。2016年から継続して活動を行ってきた結果、地域住民からさらなる継続的な活動を要望されたり、島内をはじめ新潟県内の企業から協賛を得ることもつながったほか、美術関係者への認知度もアップし大学関係や市民の参加も増加した。

活動の独自性

日本国内では沖縄本島に次ぐ大きさの離島である佐渡島で3年に1回のトリエンナーレ形式での国際芸術祭開催を目指して行われている活動。時代時代にさまざまな人や物の往来があった佐渡では、能や鬼太鼓をはじめとする、独特な芸能・文化を生み出し、独自の生活スタイルや日本文化が残っている場所である。その中で育まれた民話や伝承、この地で暮らす人々の魅力を、島内外のアーティスト達が媒介となり再発見し、多様な価値観が共存してきたこの島で、既存の枠組みにとらわれない展示空間やアートのあり方を考えていく取り組みを行っている点が活動の独自性である。

総括

検温やクラウド方式のコロナシートを活用するなど、感染拡大防止対策をしっかり行った上でこれまでのプロジェクトを発展させ芸術祭本祭として、島内各地で作品展示やアート・イベント、アート・ツアー、シンポジウム等を行った。会場には、島内各所の歴史的建造物である神社仏閣、ユネスコ世界遺産へ推薦することが決定した金山周辺の相川地区の北沢浮遊選鉱場などを選定した。今年度初めての取り組みとなったアート・キャンプやアート・ツアー、アート・イベントは、感染症対策を行い開催した。本芸術祭に関わった多くの方々から、多種多様な貴重なご意見等を数多く頂戴し、佐渡が持つ自然や歴史、文化等の魅力をアーティストと地域住民が協働で作上げ、これまで伝えることができなかった佐渡の潜在力の高さを、より広く伝えることにつながった。集客については目標としていた人数には届かなかったが、芸術祭を開催したことにより、ウィズコロナ、アフターコロナの国際芸術祭のあり方の指針の一つとなったと思う。島民だけでなく、芸術祭をきっかけに来島した参加者に、佐渡の魅力を十分体感していただくことができ、今後のプロジェクトの継続に大きな可能性と、新たな動きを生み出す機会となった。



ライブパフォーマンス「SPIRIT」



「かみとかみとかみ」とハ・ジョンナムの展示



佐渡鷹流狂言と手話狂言を大膳神社で開催

事業名	奥能登国際芸術祭 2020+		
団体名	奥能登国際芸術祭実行委員会	実施期間	2021年9月4日～11月4日
代表者名	泉谷 満寿裕	活動地域(都道府県名)	石川県
		詳細エリア	珠洲市内一円

活動の目的

石川県能登半島最先端に位置する珠洲市は、人口約13,000人、高齢化率約50%の過疎地域。しかし、半島の先端ならではの美しい景観、生業、生活様式、祭や食といった伝統文化が今も受け継がれている。この魅力をアートの力で発信したいと町の再起をかけ、2017年に「奥能登国際芸術祭」を開催。芸術祭は、さいはての珠洲市から人の流れ、時代の流れを変えていく運動であるという考えのもと、第2回目となる「奥能登国際芸術祭2020+」を開催。コロナ禍においてアーティストと市民が協働で創り上げた地域の歴史や特徴を活かした作品を通して、来場者へ魅力を発信し、移住・定住につなげる。

活動の内容

2021年9月4日に開幕したが、石川県内にまん延防止重点措置が発令されており、解除となった9月末日までは、屋外作品を中心とした一部公開のみとなった。当初予定した10月24日までの会期を11月4日まで延長し、市内46カ所で作品を公開した。

今芸術祭では、市民総参加型プロジェクト「珠洲の大蔵ざらえ」と銘打ち、各家庭に眠る代々受け継がれてきた農具や生活用品などを記憶や思い出とともに収集。これらの民具を廃校に展示し、音と光と映像、そしてアートの手法を融合させることで、他に類のない劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」が誕生した。このミュージアムを奥能登国際芸術祭の拠点施設として、今後も様々な取り組みを展開していく予定。

参加作家、参加人数

16の国と地域から53組のアーティストに参加いただき、46会場で作品を公開した。コロナ禍での開催で、海外からの来場は実現しなかったものの、約49,000人の方々にご来場いただいた。また、アメリカやオーストラリア大使館からの視察があった。

他機関との連携状況

石川県、珠洲商工会議所、珠洲建設業協会、珠洲市婦人団体協議会、金沢21世紀美術館、能登半島広域観光協会、近隣市町観光協会、(株)東急モールドズデベロップメント香林坊スクエア、(株)ハースト婦人画報社等

活動の効果

- コロナ禍で大きなダメージを負った市内の宿泊・飲食・観光関連を中心に、市内経済が好転した。
- 移住者の人数が、芸術祭開催前と比較し2倍に増加。今年度は、年間の移住者目標数を達成。
- 子どもからお年寄り、障がい者まで多くの方々に参加いただけたことで、市民の文化に対する関心が高まった。
- 会期中、毎日のようにマスコミで紹介され、来場者との交流を通し市内の魅力を再認識することで、「自信」と「誇り」を持てた。
- スモールビジネスが増加。

活動の独自性

能登半島の最先端に位置し、世界農業遺産(GIAHS)に認定された美しく豊かな里山里海が広がり、その自然環境を背景に「揚げ浜式製塩法」やユネスコ無形文化遺産に登録されている「あえのこと」、日本遺産に認定された「キリコ祭り」など特色ある生業や生活文化、伝統文化が今もなお受け継がれている。また、2018年には内閣府が選定するSDGs未来都市29自治体の1つに選ばれ、2030年を目標に持続可能な過疎地域を目指し取り組みを始めている。GIAHS×SDGs×Artを融合させることで、他にはない「さいはての芸術祭」を展開する。

総括

コロナの影響で開催が1年延期となった「奥能登国際芸術祭」。当初検討を重ねていたインバウンド対策をコロナ感染拡大防止に切り替え、来場者はもとより市民の方々にも安心して楽しんでいただけるよう可能な限り徹底した対策を講じた。63日間の会期中に、1人の感染者も出さずに閉幕でき、来場者からも地域の方々からも好評を得ることができた。

今回の芸術祭の一大プロジェクト「珠洲の大蔵ざらえ」では、約1,600点もの民具を寄贈いただき、他に類のない劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」が誕生した。また、磯辺行久氏が市内の小・中学生を対象に、風船や浮き輪に手紙を添付し、偏西風・海流の流れを調査するワークショップを展開したほか、大川友希氏による、古着を使った思い出の紐10,000本制作ワークショップには、市内全地区の婦人会員が取り組んだ。

開幕後は、子ども会から地域のお年寄りまで多くの方々を受付に入ってください、キャッチフレーズである「市民13,000人でつくる 奥能登国際芸術祭」が実現できたように思う。

この他、企業からのコラボ企画の提案をいただくなど、これまでになかった連携も生まれた。次回2023年の開催に向け、地域一体となった新たな動きを生み出していきたい。



劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」



磯辺行久による偏西風ワークショップの様子



作品説明に聞き入る来場者

事業名	Don't Follow the Wind		
団体名	Don't Follow the Wind 実行委員会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	卯城 竜太	活動地域(都道府県名)	東京都、福島県

活動の目的

2021年は東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所事故から10年を迎える年だった。そして2015年に発足した「Don't Follow the Wind」(以下DFWと略)は活動から6年がたつ。2021年度のDFWは、忘れられがちな現地の様子や人々の記憶を風化させず、より広く伝えること、そして現地の状況やDFWの活動のアーカイブの充実を図ることを活動の目的とした。

活動の内容

- 1 DFWの活動をまとめた英語版書籍の出版と映像の制作・公開を行った。
- 2 現地の人々とのオンラインでの交流、リサーチを継続した。また、帰還困難区域内での動物の生態を調べるための準備も開始
- 3 会場の一つを公開し、展示を体験するツアーを予定していたが、新型コロナの影響もあり実施を見送った。その代わり現場の下見と今後の実施計画に向けての協議を続けた
- 4 展覧会会場とその周辺の10年の変化や動きをまとめたアーカイブ資料の制作(継続中)

参加作家、参加人数

参加作家/Chim ↑ Pom、竹内公太、小泉明郎、Ahmet Ögut、グランギニョル未来
参加人数/約50人

他機関との連携状況

MOCAF <http://www.mocaf.art/>
2021年3月11日14時46分、福島県の富岡町に誕生したミュージアムであるMOCAFと、2022年3月11日の開館日に向けて情報交換などで連携した。

活動の効果

2021年度は、前年春より避難指示区域の一部で立入規制が緩和され自由に立ち入りできるようになったことを受けて、作品設置会場の一つを公開する予定だった。しかしながら、新型コロナウイルス流行に伴う人流抑制の社会情勢を鑑み、人を多く集め移動させるイベントを見送った。代わりに英語版書籍の刊行やビデオ制作を行った。世界中がコロナの影響で活動を自粛・制限する

中、書籍と映像(e-fluxウェブサイトにて公開)を発表、またオックスフォード大学オンライントークイベント(TORCH)で動画発信し、リアルな体験ではない方法で広く伝えることに成功したと考える。

活動の独自性

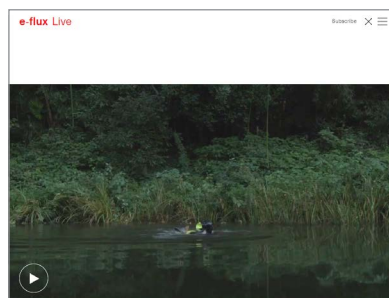
このプロジェクトの最大の特徴は、活動自体は継続しているのに、帰還困難区域が解除され人々が戻って生活できる状態になるまで人々は展示を見に行くことができない、という点である。また地元住民はじめ協力者のプライバシーと意向を尊重し、その場所や交流について積極的には表に出していない。DFWの活動を知ることができるのは、ノンビジターセンターと称した避難区域外の展覧会や出版物などによるのみである。立ち入り制限が解除される時を待ちながら、過去から現在までの状況を想像する、その時間こそが、他のプロジェクトでは見られないこのプロジェクトの最大の特徴であり独自性である。新型コロナウイルスの流行で世界的に相互隔離がなされた時期にあって、原発事故による避難区域という「以前から既に隔離されていた地域」での活動とその発信の重要性が図らずも顕わになったと言える。

総括

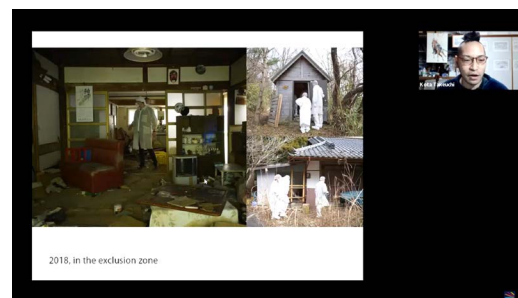
2020年から始まった新型コロナウイルスの蔓延は世界中の人々の生活様式を変えてしまった。けれども予期せぬことで生活が変わって苦しんできた、そして今も苦しむ人々と共にプロジェクトを進めてきたDFWは、その状況をよく理解している。2021年度に予定していた一部会場の公開は残念ながら開催することが叶わなかったが、その間にDFWはその準備のために十分な時間を作ることができた。また海外へ発信も続けたことで、国外へのアプローチもはっきりできた。2022年は、ここまでの準備を活かしスピーディな動きで、秋公開予定の展覧会開催と告知準備を進めていく予定だ。ただDFWでは、協力してくださっている元住民の方、そして現住民の方々の現在の気持ちと今後の意向を聴くことをこのプロジェクトの中で最も重要なことの一つと考えている。意見には一つの答えがあるわけではなく、人の数だけ想いがあるということを大前提に活動を続けている。だからこそこの指針を見失うことなく2022年度も活動を丁寧に続けていきたいと思っている。



書籍「Don't Follow the Wind」書影



e-flux ウェブサイトのキャプチャ



TORCHでのオンライントーク

事業名	UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 2022		
団体名	特定非営利活動法人クロスメディアしまだ	実施期間	2022年2月25日～3月21日
代表者名	大石 歩真	活動地域（都道府県名）	静岡県
		詳細エリア	島田市及び川根本町

活動の目的

地域が主役となる地域芸術祭として、アートを手法に無人と呼ばれるエリアの魅力や時には課題をも顕在化させる取り組み。地域とアートがまざりあい、共鳴しあうことで、地域の土台が作られ、そこで生きる人々の地域への誇りが生まれることを目的としている。また、効率化とスピード化により現代社会が失ってきた本来の意味での豊かな暮らしは、未だ無人と呼ばれるエリアの人々の生活には残っている。その価値をアートを手法に新たな視点で顕在化させることも目的とする。「ほりおこす・あらわす・ともにひらく」の3つのフェーズを軸に、地域のリサーチ、滞在制作、芸術祭会期というそれぞれの枠にて生活と芸術が行き来する地域づくりを目指す。

活動の内容

●UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川の開催

「ほりおこす・あらわす・ともにひらく」の3フェーズを軸に、作家によるエリアのリサーチ、滞在制作、そして、2つの市町を走る大井川鉄道無人駅とそこから広がる集落を舞台とした芸術祭を行った。大井川鉄道無人駅6駅とその集落の空き家や森などに15組の作家による19作品を展示した。うち、4組は作品プランを公募した作家であり、作家の作品発表の機会創出の場とした。

今回より、島田市川越し街道を新エリアに加えることで、当地を流れる大井川の持つ特異性に芸術祭としてより向き合うこととした。

12月25・26日の2日間において、芸術祭のプレイベント「奉納神事」を開催、川越し街道にて5組の作家が大井川をテーマとした作品を表現した。

●アートプラット／大井川の開催

「ぼくらのまちじゅう文化祭」をテーマとし芸術祭の会期にあわせ、市民が企画運営する文化プログラムの集約を行った。プログラムの立ち上げには伴走支援を行い、食、ものづくり、歴史、ハイキング等、年代も幅広い様々な市民が多彩なプログラムを開催した。

34のプログラムが実施された。

参加作家、参加人数

15作家が参加。

li(アイアイ)、上野雄次、形狩りの衆、木村健世、小鷹拓郎、小山真徳、さとうりさ、しでかすなかまたち、杉原信幸×中村綾花、TAKAGI KAORU、夏池篤+山本直、ヒデミニシダ、森繁哉、ゆるかわふう+原正彦、カ五山(加藤力・渡辺五大、山崎真一)

集落の人々やサポーターあまん部は延べ300名が作品制作や芸術祭運営に携わった。

会期中は約20,000人が全国各地より来場した。

他機関との連携状況

島田市及び川根本町の社会教育課(文化担当)及び観光課、静岡県文化政策課、アーツカウンシルしずおかをはじめ、大井川鉄道(株)、該当エリアの自治会、また市内企業や一般社団法人等多くの機関の協力や関わりの中で開催を行った。

活動の効果

Web版美術手帖の「2022年注目の国際芸術祭6選」に瀬戸内国際芸術祭や大地の芸術祭と並び選出され、昨年よりも大幅に多い来場者が全国各地よりあった。作家と集落住民との関係は年々深まりを見せており、その深い絆から生まれていく作品も多くその熱量は会期中の集落のおもてなしに現れている。また芸術祭との協働の取り組みが評価され、「ふじのくに美しく品格ある邑」知事顕彰を抜き集落が受賞した。

活動の独自性

2つの市町をまたぐ鉄道に沿い「無人駅」をキーワードに開催をしている。「無人駅」を現代社会の象徴と捉え、情報化、効率化により無人化が進む現代の中、関係性やつながりの希薄さと共に人が減っていくという日本に共通する課題を浮き彫りにする。しかし、エリアでは今も人のつながりを大切に豊かにいきいき暮らす人々の姿があり、それらをアートを手法に発信することで新たな価値と発見、関係性を作る地域再生の取り組みとして芸術祭を開催している。鉄道を軸とすることで浮かび上がる2つの市町にまたがる新たな地域の枠組みの中の、無人と呼ばれる集落を結ぶことで、新たな地域、新たな価値を見出す機会を創出している。

総括

神尾駅では上野雄次が、竹を400本活用し、旧駅舎を作品として生まれ変わらせ恒久設置されることとなった。抜里エリアでは住民による制作協力、作家との信頼関係から自主的に作品の設置や管理を行うなど、地域団体を中心とした支援体制が芸術祭の根幹を担っている。森繁哉公演「ヌクリ里・図絵」での幕間に、集落の高齢女性たちが、自作の衣装と唄と踊りで会場に華を添えるなど、住民自らが表現する意識が生まれており芸術祭を受け入れる土台の強さを感じた。5回の開催を通じ「無人駅エリアの風景や人の営みを開示する」という点において1つの到達点に達することができたと考える。今年度抜里エリアが、地域と芸術祭への積極的な協働の取り組みが評価され「ふじのくに美しく品格ある邑」知事顕彰を受賞した点からも地域再生の取り組みとして大きな成果といえる。今後は、大井川の持つ特異性と無人という意味を、作家や地域とともに掘り起こすとともに、大井川流域の集落から生まれ集落が動かす新しい地域芸術祭に向けて歩を進めていきたいと考える。



上野雄二／バンブーハウス(神尾駅)
写真 鈴木電一朗



森繁哉／ヌクリ里・絵図
写真 鈴木電一朗



TAKAGI KAORU / 大井川に橋は架けられるのか

事業名	「表現未満、」アートミックス 2021		
団体名	特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	久保田 翠	活動地域(都道府県名)	静岡県 詳細エリア 静岡県浜松市中心市街地

活動の目的

静岡県浜松市の中心市街地の様相は、コロナ禍によって一変した。また、社会的弱者の居場所や市民が行う文化事業の中止、廃止が続出している。中心街にある松菱百貨店は戦後復興の象徴として市民に愛されていたが、リーマンショック後、更地状態が続いている。本事業では街のステークホルダーと協働し松菱百貨店跡地で「オン・ライン・クロスロード」を開催し、同時に、「表現未満、」プロジェクト(文化祭、公募型音楽・パフォーマンス祭典、観光ツアー、哲学カフェなど)を街の各所で実施することで、市民に発表の機会を提供するとともに、障害、ジェンダー、人権などの社会包摂の場をアートによって創り出し、コロナ禍の街の新しいあり様を提示する。

活動の内容

- 「オン・ライン・クロスロード」の実施
1400坪の空き地(松菱百貨店跡地)をクロスできる道をつくり、アーティストとともに市民が遊び、表現できる場を創出した。(11月3日～7日、舞台、演劇、パフォーマンス、トーク、ワークショップ、マルシェなど)
- 「表現未満、」の波及
「表現未満、」なパフォーマンスを集めた「スタ☆タン!! 全国ツアー」を8か所(新潟、福島、長野、浜松、愛媛、五島列島、宮崎、沖縄)で実施した。また、街の文化創造発信拠点を目指して、たけし文化センター連尺町で本格的な音楽パフォーマンス(クラブ・アルス、玄関ライブ、エアロビックなど)を実施した。
- 「浜松ちまた会議」の発足
新しい街のあり方を模索する会議がスタート。

参加作家、参加人数

オン・ライン・クロスロード/開催期間5日間 延参加者数5,000人
監修/中崎透 20団体
雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!/全国8か所70組参加
表現未満、クロストーク/研究者5名(1名アメリカ)長津結一郎、若林朋子、中村美帆、ジャスティン・ジュスティ、山本浩貴
クラブ・アルス/開催3回・配信6回Motomitsu、横山雄輝、岸野雄一、珍盤亭 娯楽師匠、クボタ タケン
玄関ライブ/毎月1回12回、120団体、延500名 他

他機関との連携状況

文化庁、アーツカウンシルしずおか、浜松商店界連盟、浜松まちなかにぎわい協議会、アサヒコーポレーション、PPPデザイン、新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC、松山ブンカ・ラボ、若狭公民館、アーツカウンシルみやぎ、ぶっとびアート、そこをなんとか、BaRaKa



「オン・ライン・クロスロード」会場風景



「スタ☆タン!! Z in 松山」の様子



子供も参加するクラブ・アルスの会場風景

活動の効果

20年間、浜松の衰退の象徴となっていた松菱百貨店跡地を開き、開催した「オン・ライン・クロスロード」は、物販でもイベントでもない、アートによる「場」を開いたことで、産業だけが賑わいにつながるのではなく、人が集って賑わいができることを明確に示すことができた。これによって街の新しいあり方を街のステークホルダーがともに考える機会(浜松ちまた会議)が生まれた。「表現未満、」のパフォーマンスを集める「スタ☆タン!!」全国ツアーは全国8か所で開催され、「表現未満、」の視点を各地域の人々に広めることができた。

活動の独自性

中心市街地に拠点をもち、障害福祉施設を運営する当法人が中心となって、アートによって街のあり様を変えていく試みに着手したこと。2016年から提唱している「表現未満、」をベースとした場をつくることで、作品だけではないアートのあり様を示すことができるのは当法人の強みである。また、衰退のシンボルであった松菱百貨店跡地でイベントを行うことの意義は大きかった。さらに今後もこの事業を通して街づくりを積極的に進めていく。「全国展開を試みた「スタ☆タン!!」は、取るに足りないと思われる行為を表現と位置付けて皆で愛でる試みとして広がっている。

総括

- アートで街を変える～「表現未満、」の展開
2021年は、コロナ禍を迎え、衰退する中心市街地をアートの力で再生する試みとして「オン・ライン・クロスロード」を行った。これはアーティストに参画いただきながら「表現未満、」をベースとして様々な催しをちりばめ仕立て上げた。20年間、開かずの空間として浜松の衰退の象徴となっていた松菱百貨店跡地を開き、ここに物販でもイベントでもないアートによる「場」を開いたことは大きな反響を呼び、次年度以降も期待されている。また、産業では決して開くことができなかった場を、アートが開いたことは産業だけが賑わいをつくるのではなく、人が集って賑わいができることを明確に示せたことは、大きな成果でありこの街の状況を変えるきっかけとなった。
- 街の文化創造発信拠点
コロナ禍によって失われた表現の場を、1年間本事業によって整備し、開き続けたことは、社会に志があれば文化事業継続は可能であることを示すことができた。さらに重度知的障害者施設が街の文化創造発信拠点となり得ることを示すと同時に、さらに街づくりの中核としての認知を高めることができたのも大きな成果であった。

事業名	釜ヶ崎芸術大学 2021		
団体名	特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	山田 假奈代	活動地域(都道府県名)	大阪府
		詳細エリア	大阪市西成区萩之茶屋・太子・山王を中心に

活動の目的

コロナ禍1年目は、それでも場を開き続けることで、さまざまな事情を持った人と出会い、彼らが語り始め、希望を見出す場面に出くわすことになった。今年度も引き続き場を開き、社会的弱者に閉じ込めず、閉じこもらず、表現できる場をつくるための活動を地域のなかにつくりつづける。専門家と連携することで、支援ではないスタンスから、当事者と社会との接続点をつくっていきたい。社会を更新していくモデルとして釜ヶ崎芸術大学・ココルームの日常の場づくりを言語化するために、社会的インパクト評価や検証にも取り組む。ワークショップと発表、調査分析、そのプロセスの公開など、地域における芸術活動を多角的に拓いていく。

活動の内容

釜ヶ崎芸術大学の講座をできる限りオンライン／オフラインのハイブリッドで実施、合唱・俳句・詩・美学などの表現プログラムを開催した。2020年度取り組んだ社会的インパクト評価で掘り起こされたことば「呱呱の声」を引き継ぎ方向転換した人材募集プログラム「呱呱の人」を開催。「呱呱の人」の通過点であり実験の場として3日間のプログラム「釜ヶ崎オ?ペラ?」を7月と3月の二度実施。大阪大学とのプロジェクトKamahanは2020年度に取り組んだフードロス地域に拡げ展開させた地域コンポストをテーマに実施した。また、2月には大阪関西国際芸術祭に出品し、大阪の商業の中心地船場で釜芸講座を多数開催。来場者と表現した成果物を展示場に掲出し、毎時毎分うごめき変化し続ける場を創出した。

参加作家、参加人数

107講座、参加者1,725名。

講師／山本則幸(指揮者)、倉田めば(アーティスト)、水内俊雄(地理学者)、中川真(音楽学者)、西川勝(自由律俳句)、高木智志(人生俳句)、茂山千之丞(狂言師)、大澤寅男(文化生態観察)、村上正行(教育工学)、砂連尾尾(ダンサー)、尾久土正己(天文学者)かまぶ〜(釜芸サポートスタッフ)他

他機関との連携状況

大阪大学未来共創センターとの共催でコンポストの実践。ビッグイシュー・ダンスボックスとの共催で元ホームレスのダンス集団ソケリッサを招聘してダンスの講座を実施等。

活動の効果

人材募集プログラム「呱呱の人」は、「釜ヶ崎オ?ペラ?」の実施と度重ねた話し合いにより、スタッフやココルームに関わるメンバーが「正直に自分を表し、ココルームとはたらく」をテーマにそれぞれが取り組んでいく出発点になった。また一方で、二回目の「釜ヶ崎オ?ペラ?」を経てかまぶ〜(釜芸サポートチーム)メンバーが複数人増えて体制が拡充され、組織の持続性を支える進展があった。

活動の独自性

ココルームをどう持続させていくかを掴みとることを目的に検証してきた社会的インパクト評価「呱呱の声」が、人材募集プログラム「呱呱の人」を経て、人がさまざまな困難に直面しながら「どうはたらくか」ということにテーマが方向付けられてきた。期末に実施した「釜ヶ崎オ?ペラ?」では、「はたらく」をテーマにさまざまな切り口で語り考える場を設けた「どうはたらくか」は、「どう生きぬくか」ということでもある。また自然災害も多発するなかで、循環し持続する社会を考えることは、人々が生き続けられる社会を考えることでもある。釜ヶ崎では元労働者は高齢化し、死が非常に近くにある日常のなかで、彼らがどう生きぬいてきたかを聞き取りながら、参加者とともにわれわれが「どう生きぬくか」に熟思を重ねていることは、必然とも考えられる。

総括

引き続きコロナ禍による社会規制の緩急の波が続くなか場を開き続け、釜ヶ崎の労働者が利用してきた場や会が閉鎖されるが、ココルームに来て釜芸に参加することが貴重な場として喜ばれた。釜芸の会場はココルームが多くなりしたが、ほぼ全講座を会場／オンラインのハイブリッドでおこない、遠隔地からの新しい参加者もみられ、層が広がった。また、2〜3月に開催された大阪関西国際芸術祭では、平面作品や映像の多い展示に比して、変化し続け参加もできる釜芸の部屋は異質で印象に残りやすいものとなった。幼児から小学生の子どもと親というこれまでは少ないタイプの層が多く来場し、船場の会場と釜ヶ崎ココルームを回遊し、多くの人に存在と活動と思いを知ってもらえる良い機会となった。

組織としては、今年スタッフが全員新しくなり、人手不足ではあるが多くの応援者が現場に駆けつけてくれた。「呱呱の人」「呱呱の声」によりはたらくテーマが導き出され関係者に共有され、かまぶ〜(釜芸サポートチーム)が増えた。この場を構成するはたらく人が拡充したことは大きな成果だ。

次期は、釜ヶ崎芸術大学が変化する釜ヶ崎の地で生きぬくこと。釜ヶ崎で生きぬいた人々の残したものを取り扱っていく。



「ソケリッサと踊ろう」山王集会所



「もしやもしやの会」ココルームテラス



「釜ヶ崎と表現をめぐる研究会」

事業名	神仏習合の発祥地・国東半島 アートによる巡礼の道構築事業		
団体名	国東半島カルチャーツーリズム推進事業国東市実行委員会	実施期間	2021年11月21日～2022年3月28日
代表者名	吉水 良伸	活動地域(都道府県名)	大分県
		詳細エリア	国東市及び豊後高田市内各所

活動の目的

本事業は、国東半島にアートによる新たな巡礼の道を構築しようとするものである。半島内には、11名の国際的なアーティストによるサイトスペシフィックな作品が点在している。それらが道標となり、旅人をこの地の奥深くに流れる固有の歴史や特異な景観、土地の恵みへと導いていく旅を、数種類計画する。現在、世界は分断と対立が進んでいる。この流れは、コロナ渦においてますます進行している。多様な考えを受け入れ、平和的に共存させるといふ日本人古来の合理的考え方、神仏習合。その発祥地、ここ国東半島から“Unity in Diversity (多様性と調和)”の理念を世界に向け力強く発信することを目指し、本事業を実施する。

活動の内容

- 1 作品展示/イギリスの現代彫刻家 レイチェル・ホワイトリード氏を選定し、国東市鶴川地区の商店街に隣接するエリアに作品を設置した。地域の方へ作品のコンセプトや設置までの経緯などを解説した。また、鳥袋道浩氏、アントニー・ゴームリー氏、川俣正氏、宮島達男氏による作品も、国東市各所で展示・公開した。
- 2 ツアー/11月21日～3月28日の間に計10回開催。国東半島の魅力を体感する新しい旅「カルチャーツーリズム」をテーマに、食文化や地域体験と共にアート作品をめぐるツアーを実施。
- 3 国際シンポジウム『Dialogue in Kunisaki』/3月27日に開催。アーティストと多様な対話者による連続の対談イベント。作品の設置意図や国東市の可能性、アートが社会や地域に何を与えることができるかを考える場として実施。国東半島の新たな魅力を世界に発信することを目指した。
- 4 中山晃子スペシャルライブパフォーマンス『全ての色は流転する』/3月6日に開催。画家・中山晃子、小鼓奏者・福原千鶴、音楽家・大口俊輔によるイベント。国東半島をリサーチし制作した物語を主軸に進行する作品となった。

参加作家、参加人数

作品展示 レイチェル・ホワイトリードほか 鑑賞者数/7,069名

ツアー 鳥袋道浩ほか 参加人数/115名

国際シンポジウム

出演/アントニー・ゴームリー、川俣 正、レイチェル・ホワイトリード、鳥袋道浩、宮島達男(登壇順)、南條史生(キュレーター/エヌ・アンド・エー株式会社代表取締役)、山口祥平(大分県立芸術文化短期大学准教授)、今福龍太(文化人類学者)、河村任(国東市職員)、成仏桜会の方 参加人数/延べ615名(うちオンライン341名)

ライブパフォーマンス/中山晃子、福原千鶴、大口俊輔 参加人数/116名

他機関との連携状況

一般社団法人 国東市観光協会、株式会社UNAラボラトリーズ、(公社)ツーリズムおおいた、国東半島峯道トレイルクラブ、世界農業遺産旭日プロジェクト、旭日ネット、くにみ匠塾実行委員会、国見アートの会ほか

活動の効果

観光協会やボランティア団体、地元ガイドやアーティストなど多くの人が協働し本事業を実施したことで、関わった一人ひとりにとって国東半島の魅力を再認識する機会となった。また、さまざまな切り口のツアーを企画したことで、今後多様なツアー事業を地域で自走させていくモデルをつくることができた。ライブパフォーマンスにおいても、国東半島の歴史や伝承を新たな切り口で紹介することができた。以上のことから、地域資源の活用を継続的にこなう仕組みの基盤が造成できたといえる。

活動の独自性

本事業は従来の芸術祭に代わる地域とアートの新たな関係性を見出す一つの提案でもある。地域にもともとある資源に注目して周遊するシステムを作る文化観光を軸としている。この土地の「恵み」を改めて見直すこと、作品を設置する場所と向き合って生まれるサイトスペシフィックな「アート」を同等の価値として位置付け直すとともに、テーマ毎に企画した辿り方を紹介した。芸術祭に代わる新たな取り組みとして構想された、アートを活かしたエコミュージアムともいえる本事業によって、新たな国東半島の魅力の創出の一助となることができた。

総括

本事業は2014年度「国東半島芸術祭」で設置された作品に加えて、新しく設置された作品をほかの文化施設や地域資源とともに周遊する仕組み作りとして実施した。新型コロナウイルス感染症の影響が色濃く残り、地域の観光や経済が停滞するなか、新たな作品制作やツアー、各種イベントを企画し実施できたことはとても意義があった。新しく設置したレイチェル・ホワイトリード氏の作品は、この地域の特徴を象徴するものである。日本でレイチェル・ホワイトリード氏の恒久作品が設置されたのは初めてのことであり、非常に困難な日本家屋の型取りを実現させたことで、地元の職人の方々の技術の高さを国内外にアピールできるものともなった。失われつつある国東ならではの文化を後世に残していくうえで、この作品が大切な資源になるという声も寄せられた。これから国東市では、レイチェル・ホワイトリード氏の作品が設置された鶴川商店街エリアに観光拠点が整備されていく予定となっている。今後ますますアート作品や地域資源を活用し、多様性と調和の理念を国東半島から発信することに寄与し続けたいと考えている。



レイチェル・ホワイトリード作品
写真 久保貴史



レイチェル・ホワイトリード作品お披露目



アートガイドが作品の説明をする様子

公益財団法人 福武財団

地域振興助成
2020年度瀬戸内海地域振興助成
成果報告書（事業延長）

Fukutake Foundation

事業名	飛島の空き家対策推進のための島民と官民連携空き家マップ作り		
団体名	飛島ガーディアンプロジェクト	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	日置 幸	活動地域(都道府県名)	岡山県 詳細エリア 笠岡市飛島

活動の目的

高齢化率約90%以上、実質居住人口約40名の笠岡諸島飛島では空き家が増え、老朽化も進んでいるにもかかわらず島民や島出身者の空き家に対する興味は薄い。高齢の島民にとっては「自分たちには関係のないこと」のようだ。2020年度には崩れた空き家もあった。人口が急速に減り、島民の高齢化も進む中で、島民と一緒に空き家について考え、空き家対策を進める第一歩となるように調査を行った。笠岡市役所の担当課とも連携して調査を行い、調査の結果が目で見えるようにマップにした。空き家を放っておくことの危険性を周知し、島民と協力しながら空き家の未来を考えるきっかけとなることを目的とする。この先、空き家を活用するという道が少しでも拓ければ良いと思ひ踏み出した。

活動の経過

- 笠岡市都市計画課との打ち合わせ
空き家調査の進め方や危険家屋判定の付け方や資料作成の方法を教えてもらった。
- 島民の集会で報告、話し合い
最初は、反対意見が多かったが、実際に笠岡市の方と動くことで協力的な意見も出てくるようになった。
- 空き家活用を行った先進地区への視察
浅口市寄島町・金光町／井原市野上町
すでに空き家を活用している地域へ伺った。それまでのストーリーや方法を聞くことができた。
- 空き家調査(危険家屋判定)
始めは、笠岡市の方と一緒にいき、判定ができるようになるまで確認してもらった。危険な区域も多かったのでドローンを飛ばし上から確認したり、写真をとったりした。夏から冬にかけて少しずつ調査を進めた。(大飛島・小飛島)
- 聞き取り調査
空き家の情報(持ち主、連絡先、連絡が取れる現在居住している人、空き家の状況など)の聞き取りを行った。集落ごとに回り、一通り聞ける情報は残した。(大飛島)
- 空き家マップ作り
家の数、空き家(居住可能家屋／簡易危険度判定済み家屋／詳細な危険度判定にて危険度が高い家屋)で色分けした。
- 島民へのお披露目
空き家マップをお披露目した。いつでも、見える場所(飛島研修所)にて掲示している。

活動の成果

飛島の空き家に関する事業を初めて行ってきて、良かったこと

- 笠岡市との連携ができたこと
自分たちの判断だけでは、専門的な調査は行えなかった。教えてもらいながら、進めることで島民も少し安心して任せてもらえたと感じる。また、笠岡市全体でも、2021年度は空き家調査を行うとのことで、我々の活動を通して笠岡市に想いが届いたのかもしれない。島外への意識の影響は予想していなかったが、島外の方の協力的な意思を感じられた。2022年度も空き家に関する事は続けていくので、笠岡市が協力してくれる場面もありそうだ。
- 島民の中で協力的な意見が増えたこと
調査を進めていくと、批判的な意見もあったが「あそこ家使ってもいいよ。」や「この空き家の持ち主が使ってくれて言っていたぞ。」という声を2件いただいた。将来的には若者や島外の方が使える空き家を一軒でも見つけられたら良いと思っていたが、実際フィールド調査や集会での報告をすると、島民から歩み寄ってくれたのが一番の成果だ。島外に住む、島出身の方の中には、自分たちはなかなか島へ帰ることができないが、ご子息のために本当は管理したい気持ちや、遠い将来島で生活する意思があるという青年団の方の声も届くようになった。
- 島民と未来の話ができるようになった
空き家事業を進めていると、空き家だけでなく未来の福祉や買い物など日常の困り事が少しだけ具体的に増えてきた島民も増えたように感じた。空き家に関する動きをしていると、「これからも飛島に通う意思」や「島のことを真剣に考えていること」がより一層伝わって、未来の不安や相談をされるようになった。

今後の課題と展望

2021年度は、見えない成果(空き家に対する興味や意識の向上)のためのアクションだった。その意味では、成功だった。今後は、出てきた意見に対する計画・動きを具体的にして、実行していく。聞き取り調査は小飛島や島外在住の方へまだできていないので行う。使っても良いという空き家に関しては、持ち主や家族と慎重な相談を行い、できることを提案する。例えば、定期的に窓を開けて換気する役割・草刈りの役割を担う。空き家の片付けをみんなで行う。改修の計画や間借りの交渉、活用の仕方を島民と相談するなど、日常の中で島民と一緒に考え、進めていく。協力者や実行者を増やすのも同時に必要だ。



笠岡市担当課と空き家調査(危険度判定)



浅口市金光町大谷地区を視察



完成した空き家マップを島民にお披露目

事業名	地域を知り、地域に誇りをもつための「子どもが参画するジオツアー」の開発		
団体名	讃岐ジオパーク構想推進準備委員会	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	長谷川 修一	活動地域（都道府県名）	香川県全域

活動の目的

これまで社会人を対象とした「ジオサイト探訪」を実施してきているが、子どもや若年層へのアプローチはできていない。そこで今回、子どもや若年層が参加し、香川県内の魅力を幅広い年代に知ってもらおうジオツアーを行った。ジオツアーでは、プラタモリ風なお題に沿って、大地の成り立ちから地域の文化を再発見して、地域に誇りを持つガイド法を開発し、景観だけではないその土地の物語を伝えていく新しい形のツアーを提案する。

活動の経過

- 東かがわ市親子ジオクルーズ
2020年度/東かがわジオクルーズ下見(5月24日)、東かがわジオクルーズ動画撮影(10月13日)
2021年度/東かがわジオクルーズ開催(7月22日)
- 香川県立高松西高等学校地域探究授業「ブラ☆きなし」
2021年度/地域探究授業開催(10月1日)
- 伊吹小・中学校「ジオサイト学習」との連携
2020年度/学習発表会伊吹小・中学生にむけたビデオメッセージ(香川大学特任教授 長谷川修一)(11月6日)
2021年度/教員研修(8月18日)、小学3,4年生リモート授業(10月6日)、ジオクルーズ(10月25日)、学習発表会参加 特別講演:讃岐ジオパーク構想と伊吹島(香川大学特任教授 長谷川修一)(11月5日)
- ジオガイド研修会
2022年1月13日/讃岐ジオガイド研修会
- 成果報告会と地域資源を活用したまちづくり講演会
2022年3月1日/成果報告会 瀬戸内海地域振興助成成果報告
伊吹小・中学校の取組み 伊吹小学校 篠原五良先生、地域資源を活かしたまちづくり講演会 講師:日本ツーリズム協会 福島大輔会長

活動の成果

- 東かがわ市親子ジオクルーズ
ジオクルーズと振り返り学習を実施し、ジオクルーズでは見どころでガイドが質問し児童に考えてもらった。振り返り学習では、クルーズの内容を補足すると共に、「なぜ東かがわに天然記念物が多いのか」について児童に考えさせた。アンケート結果で児童は、ジオクルーズで質問された答えを振り返り学習で習得できたようだった。また終了後は小学校の学級新聞、日記、感想文等を書くなど東かがわの海から見た景色に関心を持ったようである。保護者は子どもたちに「地元のことを深く学んでほしい」など野外学習で学ぶことに関心が高まった。
- 香川県立高松西高等学校地域探究授業「ブラ☆きなし」との連携
現地研修と振り返り学習を実施し、現地研修では「緩斜面の盆栽栽培」「川沿いの稲作」ができる場所の大地の特性について個々に考えさせた。振り返り学習では「なぜ鬼無は盆栽の里になったのか」を補足説明した。アンケート調査では、内容をよく理解し、「いつもの通学路で、盆栽と災害、鬼無の地名、本津川の氾濫、土地による植生の変化など、新たなことを知ることができた。」と複数人が回答し、野外で行う防災探求授業は好評であった。
- 伊吹小・中学校「ジオサイト学習」との連携
教員から、「子どもたちにも座学と野外学習のジオサイト教育を通じて興味関心が深まると思う」「地形や大地の成り立ちを郷土学習に取り入れることでより深い郷土学習が行えると思う」と感想をいただいた。ジオクルーズでは、児童・生徒たちも学年に応じて内容を理解し、「機会があれば船でまた見たい」といつもと違う授業に興味を湧いたようである。
- ジオガイド研修会
讃岐ジオガイドの技術向上のために行った研修会では、今後研修会で学んだことを実践の場に活かしたいと考えているガイドがほぼ全員であり、グループワークで人への伝え方、ジオストーリーの作り方を学んだ。
- 成果報告会と地域資源を活用したまちづくり講演会
当委員会会員に向けて成果を報告した。講演会ではジオパークで地域を活性化するために必要なことについてご講演いただいた。

今後の課題と展望

今回の3ヶ所では、地域の特性を考えた物語の作成、お題の設定を事前に行い、イベント当日は、野外イベントと振り返りを実施した。野外では子どもたちに考えてもらうように質問を投げかけ、振り返り学習で補足して内容の定着を図るガイド手法で参加者の理解度が増すことが分かった。
今回企画したイベントはコロナ禍によっては一般参加者を募集できない問題点があったため、2022年度は募集型ではなくモニター型にし、ジオクルーズのモデルコースを提案し、瀬戸内海の大地の成り立ちと人々の暮らしに焦点をあてて、新しいジオクルーズツアーの発信を行っていきたい。



東かがわ市ジオクルーズ絹島の柱状節理



香川県立高松西高等学校連携「ブラ☆きなし」



伊吹小・中学校連携「ジオサイト学習」

事業名	瀬戸内海の離島集落における『生きた景観づくり』男木島らしい住空間存続のための取り組み		
団体名	安部良アトリエ級建築士事務所	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	安部 良	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 男木島

活動の目的

男木島では、過疎高齢化に伴う人口減少が進み、集落の約半数が空き家となっている。一方、魅力的な集落景観や自然環境等、島の魅力が人々を惹きつけ、近年は人口の30%以上を移住者が占めるようになった。私たちは島の大きな資産である、男木島特有の集落景観の魅力を継承するため、里山・里海といった自然環境の育成を含めた「生きた景観」づくりを目的に、集落の空き家調査や移住環境調査、景観づくりの勉強会を行う。

2020～2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響から、現地での不特定多数の人との接触を避けるため、活動内容を臨機応変に変更しながら、長期的な活動目標を達成するための足掛かりとなるような活動を進めてきた。空き家整備・活用のためのマニュアルや基盤整備のための情報収集とともに、学術分野での発表も行いながら、男木島らしさをつくり出すための議論と提案を行っている。

活動の経過

新型コロナウイルス感染症の影響で現地での活動が困難となるなか、現地協力者や外部専門家とのオンラインでの意見交換を重ね、非対面での交流の可能性を広げた。2020年10～11月にはZoomを活用した島間交流会を実施し、ゲストに地域づくりや福祉環境の専門家・園田眞理子氏(明治大学)を招き、コロナ禍での瀬戸内海地域の各島の状況や、福祉や医療現場での課題、今後の展望などを語り合った。

感染症の状況が比較的落ち着いた2020年9月に現地入りが可能となり、島民との接触は控えながらも現地での調査を再開。これまでの研究と最新の調査結果をまとめ、2020年11月に日本建築学会全国大会にて発表を行った。また、香川大学原研究室および高松市歴史資料館の協力を得て、写真や映像フィルム等の男木島の資料を見つけた。

2021年度は、これまでの研究内容を広く発信していくための整備を重点的に進めてきた。10年以上におよぶ調査研究内容を整理し、学術的知見に基づく情報基盤としてウェブサイトを開発するため、情報整理やプライバシー保護の方法など検討を重ねた。

2021年度末にはコロナの状況を見極めながらも、現地の協力もあり対面での活動が実現。生きた景観づくりのための活動の一環ともなる、男木島にある雑木林(通称・荒神林、こじばし)の整備を兼ねた環境ワークショップ(WS)を開催。島の子どもたちを中心に、樹木の調査や落ち葉集めをしながら、里山や荒神林の生態系について学ぶ機会をつくった。同時に、移住者および移住希望者による空き家改修の準備が進み、改修に向けた勉強会と意見交換が活発化した。

活動の成果

- 1 オンラインによる交流の可能性の拡大
医療・福祉資源が乏しい離島での活動の難しさを痛感しながらも、Zoom等の活用が一般的になり、また男木島ではICT活用に関し知見のある移住者が多く、これまでにない意見交換や交流のあり方が見出された。
- 2 男木島の情報発信基盤の整備/ウェブサイト「男木島アーカイブプロジェクト」公開
10年以上に及ぶ男木島の空き家と移住に関する研究の結果、男木島では空き家の存在が移住を生み出していることが客観的に解明できている。そうしたこれまでの調査研究から得られた情報を広く公開し、男木島での多様な活動に役立てられる情報基盤として、ウェブサイト「男木島アーカイブプロジェクト(<https://ogijima-archive.org>)」を立ち上げた。
- 3 生きた景観を作るための勉強会/里山環境整備
2021年度に島の子どもたちと行ったWSが足がかりとなり、自治会やPTAを巻き込んだ荒神林の整備計画へと発展した。具体的には、里山整備をしながら、荒神林の中心に残る旧保育所建物を多世代の活動場所としていく準備が始まっている。自然環境とも一体となった、男木島らしい生きた景観づくりに向けた具体的な一歩であると考えられる。
- 4 空き家整備・活用/DIYワークショップに向けた活動
移住者や移住希望者による空き家改修の計画が進み、私たちの専門性を活かした具体的な支援の機会が増加している。整備方法の相談や、DIYワークショップ準備など、次年度以降の活動につながる基盤をつくることができた。
男木島ではこれまでも移住者による空き家の改修や整備が積極的に行われており、改修方法に関するリソースも蓄積されている。そうした島の知的・人的資産も活かした空き家の改修WS開催に関し、具体的な目処を立てることができた。

今後の課題と展望

研究・活動成果の多くを島内へと還元し、島の自治活動や島民中心の空き家活用・景観保全団体へと役割を委譲させていくことを目指し、継続的な情報提供や専門家との連携と併せ、下記に取り組みたい。

- 1 「生きた景観づくりマニュアル」検討委員会を発足し、住宅整備方法をマニュアル化する。
- 2 島内に空き家管理・整備・移住相談と「生きた景観づくり」をリンクさせた活動母体を設立。
- 3 管理者不在の空き家の所有者と連絡をとり、管理契約を結ぶシステムを検討する。
- 4 行政との連携が課題だが、規制の制度の流用は島の独自性や移住の増加を断ち切ってしまうリスクも考えられるため、適切な支援を得るための体制づくりを検討する。



「黒木島アーカイブプロジェクト」



生きた景観づくりと空き家改修方法の勉強会



空き家を活用方法と石垣修繕方法の勉強会

事業名 石切りの道具づくりと石切りの技術(矢穴技法)への挑戦による地域力創造プロジェクト			
団体名	川宿田 好見(個人)	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	川宿田 好見	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 小豆島町福田地区

活動の目的

港では石船が行き交い、山では石工が石を切り出し、鍛冶の音が響く。これが小豆島の北東に位置する福田地区のかつての風景であった。

古くは大坂城築城から、伏見城、皇居、伏見桃山御陵などの建造という歴史的出来事のなかに「福田の石」の記録が残っている。この歴史的背景が、「石」に関わることへの誇りに繋がっていた。現在では、その面影は薄れ、石との関わりがほとんどなくなってきている。その課題に対して、この地で「石切り」という江戸時代から使用されてきた技術に挑戦し、大坂城へ石を運んでいた歴史とともに世代を超えて発信することが求められている。

そこで、石工による技術公開のワークショップや福田地区まち歩きツアーを実施し、石に触れ、石とともにあったこの福田地区を学び、体験する機会を作ることを目的とした。

活動の経過

本プロジェクトの活動は、大きく3つに分けられる。

1 石工の技術公開ワークショップ

対象地とする小豆島町福田地区は、石の歴史や文化と関わりの深い地域であったが、現在では石との関わりを感じられる場が少ないため、直接的に石に触れ合うことができる場を公開ワークショップとして提供した。公開ワークショップでは、現役の石工さんによる実演を一般の方に見てもらうとともに、石工さんには、江戸時代の石割の技術についての研鑽を積む場とした。福田地区と石の歴史や文化を石工さんを通じて他地域に広めるネットワークを作っていく仕掛けとしても有益であった。

2 福田まち歩きツアー

まち歩きツアーを開催することで、石切りの技術や、福田地区についての理解を深めてもらう機会とした。福田地区は、香川県立石工補導所(石工養成所)があった歴史もあり、石とのつながりがわかる地点を紹介できるコース設定を行った。福田を歩いた後は、石切り(石割)の技術に触れられる体験の場を設けた。

3 情報発信

福田の歴史的背景や、石材業について紹介する場が必要であると考え、ホームページを新設することとした。ここでは本プロジェクトの活動内容や、石ワークショップの記録映像の公開を進めていく。

活動の成果

2021年12月に旧福田小学校グラウンドにて『石切りの道具作りと石切りの技術ワークショップ』を開催した。ワークショップでは全国各地から18名の石工さんや研究者が石の技術を探求しに来島した。約400年前に大坂城築城石材を採石した歴史のあるこの福田地区で、「ノミ」で矢穴を掘り、「矢」を使い、石を割る「矢穴技法」の技術の実践を行った。

石工さんたちは、石の特徴や硬さを確認し、ノミとセットで石を割るための「矢穴」を掘る作業を黙々と実践した。「矢穴」を掘るためには、道具も必要であり、その道具を自作する鍛冶の様子も公開した。今回来島した石工さんたちは日常の業務では使用しないかつての技術に真摯に向き合ってくれた。その結果、3つの大きな石が機械の力を使わずに割れる様子を公開することができた。

福田まち歩きツアーではコロナ禍であったこともあり、参加者との距離を保った状態で解説できるようにイヤホンガイドを導入した。ツアーには、18名が参加した。福田地区の何気ない景色の中にある、石の歴史がわかるポイントを紹介した。家の石垣や、かつて使用されていた石臼や重石などが庭先に置かれている様子、花崗岩の露頭に囲まれた地区全体の様子などである。目的地としては日本遺産の構成文化財にもなっている大山祇神社裏の巨石、近現代に石を切り出した森ヶ滝丁場跡を取り上げた。観光資源として積極的に活用されている場所ではないが、福田の物語とともに案内することで十分見ごたえのある場所であることが確認された。

まちあるきツアーの参加者に「矢穴掘り」「刻印掘り」の体験メニューに挑戦してもらった。石工さんの説明を受け、ノミとセットを使い石を彫る作業は、貴重な体験であったと好評であった。

今回は、広く参加者を募集することはできなかったため成果の周知方法として、新設したホームページを活用し、記録映像と共に発信を行うこととした。

今後の課題と展望

全国の石工が矢穴技法を学ぶ場所として、この小豆島福田地区を定着させ、毎年全国各地から研修を望む石工が来島できる仕組みを構築する。福田地区で研修した石工には、福田地区の魅力発信を地元で行ってもらうことで、関係人口の増加を試みる。島外から、福田地区の魅力求めて多くの人々が来島することで、地域住民が石の歴史や文化に対する誇りを持つことを狙う。

研修にきた石工と地域住民が触れ合う機会を、今回実施した公開ワークショップの様な形で提供するとともに、研修やワークショップ等の映像記録を蓄積、発信することで、石の歴史文化が根付く地域としての認知度を向上させたいと考えている。



公開ワークショップ/石を割る



福田地区でのまち歩きツアー



刻印彫り体験

事業名	豊島 KIMAMORI▲Work 2 ～豊島の医療福祉文化史料アーカイブ & 検証事業～		
団体名	小澤 詠子(個人)	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	小澤 詠子	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 豊島家浦地区

活動の目的

かつて「福祉の島」とも呼ばれた豊島の現在と未来に必要な、医療上の重点要素・福祉的活動を考察・実践・検証し続けることを通じたケアを目的とし、古民家A(以下A家)での豊島関連史料アーカイブと回想療法・世代間交流を主たる手段とする。文献蒐集・聞き書き調査で捉えた豊島の民俗を医療福祉の視点で捉え直し、その成果物(分析・編集・デジタル化)が触媒となって生まれるケアの「瞬間」や交流空間をうみだす。

交流主体は、島民のほか島外から帰省中の家族や移住者、島内高齢者福祉・保育事業者及び利用者とし、タッチケア・グリーンワーク実績のある看護師がコーディネートする。プロジェクトベースの随時チームを組み、学識者等の応援も得る。改修では、A家の元の姿を尊重しつつ乳幼児・高齢者にとって低リスクで安心して落ちつける空間を目指し、塗装材の厳格な選定や歴史的什器発掘に努める。

活動の経過

コロナ禍で変更・1年延長となったが、実質的活動は後半1年のうち感染縮小期に集中させる経過となった。企画代表者が島内医療従事者であることから、他者との接触制限・渡航自粛が著しく急な病休期間も経たため、島外の家族を対象とする対面交流と企画運営のチーム化は一旦諦め、「限定した場と人」内で可能な活動に絞った。

経過は①デジタルアーカイブシステム構築(デモ版)、②文献検索・蒐集、③聞き取り調査、④分析・編集・デジタル化、⑤交流機会の準備・実施、⑥改修構想・準備・施工の6層に大別できるが、上記事情から、「県内・オンラインのみ」、「運営協力者2名・施工業者1社」に固定し、代表者が生業＝医療業務上免疫低下者・抗原検査等に携わる場合は前後10日間の活動を停止する制限を課した。

文献調査では、医療・福祉の公的性格を鑑み、自治体発行の郷土史料を軸に、各種論文、オンライン検索&取寄せ、蔵書館利用、島内所有者訪問等から入手した知見をマッピングする手法で6領域を1～3巡したもの、郷土史料は禁帯が多く取扱いに手間取った。聞き取りでは、年齢・健康状態やテーマに応じ誰に何をどう尋ねるのが適切かを逐次熟考して実施した。交流では、各人の来歴・需要やパーソナリティを活かしプライベートサロン風楽しんだ。トイレ・空調・棚を施工し、歴史的什器の再生にも取り組んだ。

活動の成果

- デジタルアーカイブシステム構築では、NAS(ネットワークHDD)を用いてA家母屋・納屋のTV複数台をデバイス化&一元化した。後期高齢者や乳幼児にとって馴染みあるTV活用によって、滞在空間の操縦実感を高めてもらい、運営側のセキュリティや効率も高めた。
- 改修では、トイレ簡易水洗化と空調新規設置(2台)、既存建具や床材のメンテナンス(紙・木材等の呼吸を妨げない塗装)、歴史的什器に拘った室内家具を転倒予防も兼ねた配置・形態にすることで、元来バリアフルな古民家を極力バリアフリー化した。納屋は基本的に無垢材・加工木材の面取什器で統一し乳幼児～年少者が集える空間を目指した。
- 史料蒐集(県内踏査)では、島民生活・信仰・産業・教育・福祉(保育&介護)・医療の6領域で実施した結果、島内保育・高齢者福祉事業の沿革を論拠を伴って抽出でき、引き継ぐリサーチクエストや仮説も得られた。殊に島民からの紹介文献によって「豊島における賀川豊彦」像や豊島ナオミ荘設立時背景が具体化された成果は望外であったが、現神愛館(坂出市)の現存史料が少なかったのは無念だった。また、豊島教会歴代牧師の図書室や鳴門市賀川豊彦記念館を各県内在住者で訪れ現役管理者と対話を深め、瀬戸内海の島々の伝道史料・蔵書目録(写真)を得、今後の文献蒐集に役立つ視座も得た。
- 聞き取りでは、島の保育・高齢者福祉事業について関係者と非関係者計7名の記録を、メモや映像・音声データでNASに格納した。保育事業沿革は年表形式で簡易編集した。
- 交流機会は8回マネジメントした。民俗史料の閲覧・読合わせ(2回)、豊島小中OBである島外別居子の著作(育児書)を当該母親と育児世代で囲んで感想交流、豊島関連本格映画や話題作の鑑賞(2回)、要支援・介護者のデイケア的サロン&レスパイトケアの試行、知育玩具/教材での遊びと見守り、移住動機等の対話がなされ、どれも好評だった。
- 総じて「普段の生活を彩る役割」(ケア)を果たせつつある。

今後の課題と展望

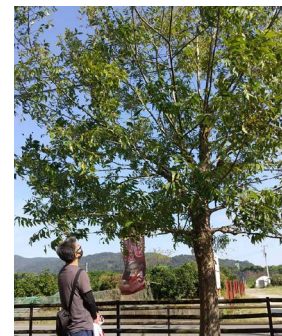
調査において、深度が浅い領域の調査蒐集を深め、逐次編集へシフトする。可視化の際には、乳幼児・高齢者がよりアクセス・視認しやすい形態を追求する。新型コロナ感染状況に応じて、チーム化/法人化/島外/障がい者福祉へのアプローチを進める。交流については、継続性を重視して一部共同事業化の可能性を探る。「理解者がいる・理解したい・しようとしてくれている」ことの体感ケアであるとの信念のもと、記憶が世代間で共有・融和されることで安心がひろがる空間づくりに努めていく。また、今回改修した古民家Aは島民や島外別居子とのコミュニティスペースとして活用していく。そこで2020年度に感染症の影響で中断していた、島内の方の記憶や思いをヒアリングシナリオ編集することを再稼働させ、豊島の人々の生活の記憶を残していきたいと考えている。



島内外オンラインで史料閲覧・読み合わせ交流



改修納屋で遊び見守り(三球儀&万華鏡制作)



亡祖父が贈ったペカンと孫の対面

事業名	芸予諸島に残存する古民家を住み継ぐための持続的・実践的活動		
団体名	日高仁／関東学院大学＋西澤高男／東北芸術工科大学	実施期間	2020年4月1日～2022年3月31日
代表者名	日高 仁＋西澤 高男	活動地域（都道府県名）	愛媛県
		詳細エリア	今治市大三島町／上島町

活動の目的

愛媛県芸予諸島周辺では、他の島嶼部と同様に人口減少、高齢化と、それに伴う空き家の増加が問題となっている。本活動では、こうした空き家や空きインフラを活用するイメージが湧くところまで手入れをして公開することにより、居住や活用を希望する方への橋渡しをすることを目指す。特に、多くの手入れが必要な古民家や、その規模故に扱いづらい公共性の高い建物など、住みこなしが活用しにくい難易度は高いが、地域固有の文化を継承したり、ランドマークとなってきたりした空き家が、瀬戸内の気候条件の良さ故に多々残存する。こうした建物の空間が持つ潜在的な魅力を発掘し、その要素が顕在化する設えをした上で公開し、その体験を移住や利活用を希望する方や地域の方々と共有することで、これらの空き家が活用され、住み継がれてゆくきっかけを作り出すことが本活動の目的である。

活動の経過

これまで助成頂いた活動の中で関係を築いてきた上島町弓削島と今治市大三島で活動を実施した。

大三島では当初、集落内にある古民家での活動を予定し、ご協力いただいている現地NPOの方々と共に準備を進めてきたが、状況の変化により当該建物での実施を見直し、地域のランドマークだった島内の別の物件をご紹介いただいた。架橋前は本四航路の経由地だった宗方港の側に建つ「かわかみ旅館」は、かつて今治などから大勢が訪れて賑わったが、交通体系や需要の変化によって廃業し空き家となっている。建物自体は綺麗に維持されており、目の前に入り江の海が広がる好立地であることから、活動の対象とすることにした。特に旅館前の海に浮かぶ棧橋には無二の魅力を感じ、ここに海面に触れることのできるほど海に近い「海上カフェ」を仮設。そこでの体験を共有して、活用に向けた可能性を探った。

愛媛県上島町では、これまでの活動で実現した交流拠点「上島町ゆげ海の駅舎」を、住民と来訪者相互の交流の場として更に活用していただき、移住促進にもつなげるための活動を検討。日々この場所を放課後の学習スペースとして活用している高校生たちにヒヤリングを行い、一番希望の多かった日除けカーテン作りを進めることとなり、大学時代に弓削島で活動して以来島に関わり続けてきた卒業生が中心となって、映像制作やカーテン作りワークショップを実施。また、施設の利用実績が認められ行政から設計当初の構想にあった前面道路や緑地などを一体活用する外構計画を打診され、整備の準備を進めている。

活動の成果

芸予諸島地域では、これまでに交流のある現地の組織や自治体などと連携した、複数の事案がある。いずれも空き家や廃港などの休眠インフラの活性化や、潜在的な固有の地域資源の魅力を顕在化させ、集落や産業を活性化

せることを目指している。新型コロナウイルス拡大により時事刻々状況が変化することで、現時点で実施可能なことを柔軟に、実践的かつ持続的に継続することを目標として活動した。

大三島では2019年度、廃業して久しい「かわかみ旅館」とその前の浮き棧橋での空き家活用のための社会実験「海の縁側」を展開した。現在、旧「かわかみ旅館」は大三島在住の方が購入し、福祉施設としての活用を検討したが中断した。引き続き地域の方々のための活用を模索しているとのことで相談を受け、2020年11月に訪問し将来の展望をお聞きし、2021年3月、宗方港周辺の島への航路や港、集落のリサーチを実施。2022年3月に改めて話し合いを行い、地域内外の方々に向けて開かれた施設として、海辺の別棟倉庫と浮き棧橋も含めた活用する方法について、引き続き協働することとなった。感染状況の好転の機会を見て、社会実験をしながら進めていきたいと考えている。

弓削島では、これまでの活動に関わった大学の卒業生たちを中心として、これまでの活動の成果として2017年3月に竣工した「上島町ゆげ海の駅舎」を拠点とした交流と活用促進を継続。2020年11月、島の高校生たちと、イングランドのバンド・キャラヴァンの元メンバー、デイヴ・シンクレア氏の協力により、海の駅舎のプロモーション映像を撮影、年末より配信しており、引き続き製作を予定している。また、2021年3月には、上島町より施設の前面道路と緑地を活用した「海の駅前広場」整備のための社会実験の実施について相談を受け、企画提案を元に上島町長・町担当者と打合せと現地確認を実施。道路使用など具体的な課題についての協議を行った結果、最初の段階として前面道路を廃止して海の駅舎と一体的に使えるよう、議会決定がされた。2022年3月には改めて行政や、現在施設を運営している方々と打合せを行い、コミュニティビルドによる住民参加型の「海の駅前広場」本整備を進めるために、社会実験や設計・施工手法の検討などの準備を進めている。

今後の課題と展望

私たちはこれまでの一連の活動で、潜在的な場所の可能性を社会実験により顕在化し、思い描く理想的な将来像を地域の方々と共に共有し、ご意見をいただきながら修正していく中で「みんなで空想を共有し、『欲しかった場所』をつくる」ことを目指してきた。整備と運営、現在大三島や弓削島では複数の事案がありそれぞれ活動の段階は異なるが、これからも実践的かつ持続的に考えていきたい。

また、これまでの空き家活用やそのスタートアップのための活動を通じて得られた知見を役立てていただけるよう、休眠インフラ活用の手法「瀬戸内メソッド（仮称）」を成功体験、失敗体験も含めてとりまとめ、公開するための準備を進めている。併せて、各地での同種の活動へのサポートも、進めてゆきたいと考えている。



海の駅舎プロモーション映像撮影の様子



ライブ配信を通じて外部空間との活用を PR



高校生たちの協力による海の駅舎の配信映像

公益財団法人 福武財団

地域振興助成
2021年度瀬戸内海地域振興助成
成果報告書

Fukutake Foundation

事業名		塩屋布団太鼓の次代を担う乗り子の育成と継承	
団体名	塩屋青年会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	岸部 克俊	活動地域(都道府県名)	兵庫県 詳細エリア 神戸市垂水区塩屋地区

活動の目的

神戸市垂水区塩屋地域は、瀬戸内海、淡路島、明石海峡大橋を望む風光明媚な所だ。塩屋青年会は地域の郷土芸能である布団太鼓・獅子舞を受け継ぐ団体である。時代の変遷とともに生活様式が大きく変化し、後継者不足が深刻化するなど各地のお祭りが衰退するなか、町の核となる布団太鼓が平成20年に約半世紀ぶりに復活した。布団太鼓の復活により、地域とのつながりが希薄化した町でお祭りを通じて、多世代交流促進に努めると共に、地域の皆様に元気と勇気を届け地域の発展活性と伝統を後世に伝承する活動を行っていく。また伝統文化の保護振興への貢献として、布団太鼓・獅子舞を通じ地域の子どもたちに郷土芸能に触れて学ぶ機会を与える取り組みを行っている。

活動の経過

2021年度の活動として、乗り子の安全面の環境づくり、乗り子から担き手へと各世代の役割が継承出来る組織作り、WITHコロナの視点で布団太鼓巡行に向けてどう活動すべきかを地域関係団体を巻き込み、自治体の感染予防ガイドラインを用いての開催検討を行った。

4月の緊急事態宣言、9月末迄のまん延防止等重点措置の発令により予定していた、5月、7月の獅子舞公演、10月の秋祭り布団太鼓巡行は中止となった。結果としては2021年度の予定していた獅子舞公演や太鼓巡行は実施出来なかったが、来年以降の活動も踏まえて、塩屋地域在住の子どもたちに、一人でも多く参加してもらうため、各小学校への広報活動(獅子舞公演・郷土芸能の課外授業)をはじめ、垂水区役所まちづくり課郷土芸能保存会を中心に地域関係団体に改めて深いご理解をいただき、布団太鼓継承につながる活動を行った。

改めて布団太鼓・獅子舞が復活してからの13年間の活動を振り返り、布団太鼓・獅子舞を継承して行くうえでの気づきや新たな発見や改善を行った。

活動の成果

活動の中で下記の課題を解決して成果に繋げることができた。

- 課題1 布団太鼓櫓内のスペース確保による乗り子の安全確保。13年前に譲り受けた布団太鼓は一回り小さい太鼓であり、その櫓を基に改修を行ったため構造上、櫓の四本柱間が大変狭く乗り子が座って太鼓を叩くには空間が狭くて、叩き辛く不安定な姿勢で行っている。
- 成果1 乗り子が安定した姿勢で叩けるための四本柱を拡張して空間の確保を行った。櫓の構造上安易に四本柱を拡張する事は困難であった。彫物などの装飾品の位置が変わることで屋台全体の意匠にも影響を及ぼす可能性があったが、他地区の布団太鼓の構造や意匠などを研究、対応して頂いた宮大工と何度もすり合わせを行い実現する事が出来た。広がった櫓内で実際に乗り子たちに太鼓を叩いてもらい「安定した姿勢で太鼓を力強く叩けた」「座って安心して太鼓を叩ける」「広がったので太鼓のバチが柱に当たらなくなった」などの感想を聞く事が出来た。
- 課題2 櫓内の空間が狭い問題により乗り子は小学校高学年までの年齢制限を設けていた。それにより中学生が活躍できる場が無くなり担き手として活躍できる高校生までの間、布団太鼓への関わりが無くなり担き手の育成や伝承に影響を及ぼしていた。
- 成果2 櫓内が広がった事で中学生まで乗り子として参加できる環境を整えた。昨年まで乗り子をしていた中学生が乗り込み問題なく太鼓を叩く事はできた。
- 課題3 二年続けて布団太鼓巡行が中止になった事で、地域の子どもたちに布団太鼓の魅力をどう伝えて活動するのか。
- 成果3 垂水区の郷土芸能保存会のご協力で以前発刊した「垂水の布団太鼓」を更新、地域の小学校、中学校の各学級と幼稚園や児童館に冊子を配布した。「初めて布団太鼓を知った」「太鼓を叩きたい」「乗り子の半纏を着たい」などの声を直接聞く事が出来た。

今後の課題と展望

課題として、ハード面では中学生まで乗り子として参加できる環境を整える事ができたが、ソフト面では乗り子の育成や担き手への継承は、成果として現れるまでは最低3年は必要であるため継続的に育成と継承の活動を行っていく。

展望として、本年度獅子舞の獅子頭の新調を行った。ここ数年布団太鼓の活動が中心であったが同じ地域の伝統芸能の一つである獅子舞の活動にも次世代への継承を行い布団太鼓と両輪で活動を強化していく。



太鼓蔵での展示と修繕のお披露目



冊子「垂水の布団太鼓」を小学校に配布

事業名	あらたな対話で継承をひらき、橋を架けていく		
団体名	一般社団法人ひばりエンタテインメント	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	鎌屋 翔子	活動地域(都道府県名)	岡山県 瀬戸内市邑久町虫明 長島

活動の目的

長島のユネスコ世界遺産登録を目指す瀬戸内市と、長島愛生園、同歴史館及び同居入所者自治会と協働し、社会全体へ対するハンセン病問題の正しい理解の普及啓発に寄与することを目的とする。入所者の高齢化が進む愛生園が現在抱える課題のひとつに「継承」という行為がある。人や場所の記憶を受け取り、語れなさを語る。誰でも自身の内面に波紋を広げていった先に当事者となり得る何かを秘めている。今回は、本法人が長島愛生園入所者自治会から運営を委託されている「喫茶さざなみハウス」を拠点にして、個人的な体験と大きな歴史、自分と異なる他者との交差点を探るシンポジウムとワークショップを実施。長島に常設を目指すダイアログ・イン・ザ・ダーク(以下DIDと略)の取り組みを中心に新しい対話・感覚の模索を目指す。

活動の経過

新型コロナウイルスの影響や関係各位のスケジュールにより、全体のスケジュールは遅延したが、無事に開催にいたった。

- 2021年7月27日 DIDミーティング・運営会議
将来構想、DID設置に向けた現状の課題、TODOの洗い出し
- 11月30日 運営会議
園に向けた今後の提案方法について
- 12月10日 運営会議
イベントの最終内容、ゲストについて
- 12月19日 運営会議
3月19～21日のイベントタイトルの決定
長島ダイアログ3DAYS「ひらかれる継承、それぞれの架橋」
- 2022年2月15日 愛生園と自治会とイベントの最終協議と調整
- 3月3日 まん防期間延期によりイベントのオンライン開催を決定(うち演奏会は延期)
- 3月14日 21日のイベントのゲスト最終ミーティング
当日のテーマ・流れの最終確認
- 3月21日 開催日/15時スタート、18時30分終了
「あらたな対話で継承をひらき、橋を架けていく」
- 3月24日 運営会議
イベントの振り返りについて

活動の成果

2022年3月21日 15時～18時30分
長島ダイアログ
あらたな対話で継承をひらき、橋を架けていく
会場/喫茶さざなみハウス
司会/堀潤(NPO法人8bitNews代表理事、ジャーナリスト)
ワークショップ進行/林暢明(TAO主宰)
基調講演1/志村真介(DIDジャパン代表)
志村季世恵
(一社DIDジャパン・ソサエティ代表理事)
基調講演2/和田夏実(東京大学大学院総合文化研究科研究員)
特別ゲスト/中尾伸治(長島愛生園入所者自治会会長)
山本典良(長島愛生園 園長)
田村朋久(長島愛生園歴史館 学芸員)
記録映像URL <https://youtu.be/YyjGvqw6lpl>

2030年に国立療養所長島愛生園の開園100周年を迎えるにあたり、継承・対話について様々な視点から語った。国の隔離政策により、入所者は入園後子どもを持つことができなかった。2世3世と語り継ぐものがおらず、地域で歴史を伝えていく必要がある。長島に関わったひとりひとりが継承という行為に参加していくためには、自分の心を柔らかくして対等な対話の可能性を探っていくことが大切である。大きな歴史を背負った長島だからこそ伝えられる対話の可能性がある。深い対話の時間となった。後半は林田暢明さんによるグループでのワークショップを行い、参加者の皆さんとそれぞれの気持ちを語った。
本イベントは映像とグラフィックレコーディングでアーカイブしている。

今後の課題と展望

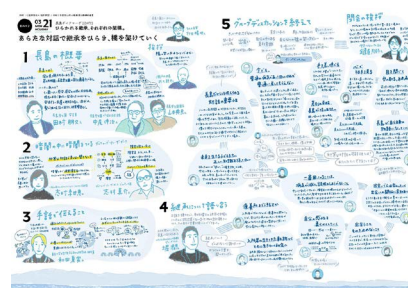
今回のイベントを通じて開園100周年に向けた節目を瀬戸内市、愛生園、入所者自治会ともに改めて意識できた。また、DIDの可能性についても互いに認識し合えた。今後は活動をより広めていくために、支援者の輪を広げる仕組みづくりが必要と感じている。また、長島の島外の多様な感性がまじりあう場所としてさざなみハウスを継続させ、発展させていくこと、入所者と共に歩んでいくことも重要な課題である。



イベントフライヤー



オンラインイベントの一幕



対話のグラフィックレコーディング
クレジット 北浦菜緒

事業名	昔から受け継がれてきた下津井の魚食文化の掘り起こし、 下津井の素材を使った創作料理のメニュー開発をして、町の観光資源に生かそう！		
団体名	下津井 sea village project	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	牧 信男	活動地域（都道府県名）	岡山県 倉敷市下津井エリア

活動の目的

- 下津井の食文化の継承と下津井産魚貝類のブランド化を目指す。
- 下津井を食育・生命教育の学びの場にする。
- 下津井を訪れる人に食を通じて豊かな自然、風土、人情にふれ、地元の人と観光客、また地元の人同士の交流を促進する。
- 観光客・土地の人・生産者が食を通してふれあい、互いに自然を思う気持ちが持てるようにする。
- 生産者は、自分たちが生産した食材を喜んで食する消費者の姿を思い浮かべ、ますます誇りややりがいをもって海の仕事に励めるようにする。

活動の経過

- 2021年4月～6月 地区の住民、小中学生へも協力依頼し下津井素材を使った料理のレシピを集めた
料理計画、レシピ作り、製本化の計画を立てる
- 6月26日～7月11日 集めたレシピの展示会
- 7月9日・10日 コンテスト
- 7月11日 優秀作品授賞式
- 7月～11月 出版の為に料理作り・試食、写真撮影、執筆依頼
- 10月～12月 管理栄養士などとともに原稿作り
- 12月～ SSVプロジェクト結成、毎木曜日編集会議
原稿作成・製本化の作業に取り組む
- 2022年1月 書籍名「瀬戸内 下津井 お魚料理」に決定
- 2月～3月 販売計画、広報活動への戦略会議

活動の成果

- この地域の昔から受け継がれてきた魚食文化の調査活動、再現活動により、かけがえのない郷土の食文化を意識つけることができた。
- 下津井の素材を使った料理のメニューを考案し、新しい時代の食文化を生み出す意欲を下津井から発信することで下津井産海産物のすばらしさや下津井の風土・文化にも興味、関心を持ってもらうことができた。
- 懐かしい郷土の味や下津井素材の新メニューを発信することで、新たな観光資源を生み出し、地域力創成、地域の魅力アップにつなげることができた。
- 地元ホテル、地区の料亭、小売店だけでなく生産者も快く取材協力してくださり、下津井ブランドを広めるパワーになった。個々の事業所としもついでにシール、ステッカーとつながり、事業所同士のつながり、また生産者との絆も増したのではないかと感じる。
- コロナ禍の終息も相まって訪れる観光客もコロナ前の約7割方戻ってきた。また料理本刊行に合わせて、下津井の魚が食べられる店もオープンし、下津井の町が活気づいてきた。
- SNS発信に加え、新聞、テレビ、ラジオが数回取り上げてくれ、下津井の魚の知名度を高まり、地元食材のブランド化に貢献できたように思う。

今後の課題と展望

- 今後、下津井で行うイベント・SNSなどを通じ、下津井料理を広めていく努力を続ける。
- 今後も下津井料理を広げていくためには、移住してきた者も含め、地域の若い世代の活躍の場を提供していくことを心がけたい。
- 本の普及を通じて、海の生き物に関心を寄せ、食材に命があることを知り、命を粗末にせず感謝していただく提案をしていく。本書の真髓ともいえる「感謝の心」を伝え広め、人々が資源保護にも関心を寄せてくれることを狙っていく。
- 続けて産官学の関係諸機関、生産者、近隣の市町村とも連携を深めて活動を広めたいと考えている。



6/26～7/11 レシピ集展示



料理計画、レシピ作り、製本業化に向けて



料理本は公共機関、商店等に配布・販売

事業名 空き家と耕作放棄地の利活用を通じた地域づくり	
団体名 くにとの御船を守る会	実施期間 2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名 笠原 宏之	活動地域(都道府県名) 岡山県 詳細エリア 浅口市寄島町国頭地区

活動の目的

国頭地区に増えた空き家と耕作放棄地の解消に、地域固有の景観・町並み等の環境資源を活かしながら取り組むことで、地域の賑わいを維持向上させ、将来的に地域住民が一体となって、より良い暮らしのために行動できる地域を目指す。今事業では、空き家対策として、景観を保全しつつ空き家の利活用を行う、空き家を再生させた集いの場「ちょっと寄ってえ家」の運営と、移住定住促進のための相談対応拠点・体制づくりに取り組む。また、耕作放棄地対策として、体験観光農場の開設・整備の他、国頭地区裏手の里山の荒廃の防止、保全の気運醸成と交流人口獲得のため、草の刈払いや雑木の伐採作業を通じた散策が可能な環境づくり、地域にあるトレッキングコースの維持管理などを行う。

活動の経過

空き家対策の活動として、通年で定例会議を実施し、活動内容についての計画、共有、必要な作業の確認等の実施、活動＆交流拠点「ちょっと寄ってえ家」の運営を通じた住民その他来訪者との交流、相談対応に取り組んだ。10月には空き家を再生させた住民集いの場を運営する、新潟市の「実家の茶の間紫竹」と、その協働相手である「新潟市地域包括ケア推進課」を視察し、その効果やノウハウ、行政との協働の仕方について学び、11月に視察成果報告会を実施した。視察時の学びを活かすため、地元事業者を講師に「ちょっと寄ってえ家」をDIYで改修し、マルシェや展示などもできる、集いやすく明るく快適な空間づくりに取り組んだ。

里山保全の活動としては、耕作放棄地解消作業、体験観光農場の管理(除草、水やり、定植等)をメンバー他協力者と適宜実施した他、地区裏山里山・トレッキングコースの通路整備に係る除草伐採作業に地元青年団等と連携しながら取り組んだ。体験観光農場を活かした交流として、寄島小学校、寄島中学校の地域学習での利用や授業運営支援依頼などがあり、複数学年の支援を行った他、地区の子どもたちなどを対象に収穫体験を実施した。

それらの活動の様子を適宜FacebookやInstagramなどで紹介した他、2月には活動報告会を開催し地域内外に報告した。3月には次年度の活動計画を策定した。

活動の成果

空き家対策の成果としては以下が挙げられる。

- 視察の成果を反映し「ちょっと寄ってえ家」の交流拠点としての整備を進め、使い勝手、快適性、省エネ性能、認知が向上したことで、維持管理コストの減少、利用者の増加、使われ方の多様化といった効果があった。また、改修に係る作業をメンバーによるDIYで実施したことで、空家利活用のノウハウを習得した。
- 空家の相談対応件数が増加した(1,2件→4件)。また別事業での、空き家を再生させたお試し暮らし住宅整備の取組で入居者があるなど、移住に関する相談も増え(0→2件)、関係者への相談を通じた体制作りが進んだ。里山保全の成果としては以下が挙げられる。
- 耕作放棄地を体験観光農場として再生したことで、景観の向上と、産品販売の収益を得ることができた。
- 体験観光農場での交流の実践、トレッキングコースの利便性や認知の向上を通じ、多くの利用者・来訪者があった(体験観光農場は80名程度、トレッキングコースは1,000名程度)。小中学校の利用もあり、学校の授業運営の支援・連携にも繋がった。
- 増加した来訪者に対して、地域ぐるみでの道案内等が行われるようになったことで、交流人口拡大の主体形成に繋がった。両活動の様子はメディアに複数回取材・報道されたことで、認知が向上し、地元住民から手作りバッグの寄付(「ちょっと寄ってえ家」での販売益を寄付)を受けることができた。その他「あしたのまち・くらしづくり活動賞」の振興奨励賞を受賞することができた。

今後の課題と展望

空き家対策活動、里山保全活動ともに体制整備を具体的に進めることができた。行政や自治組織との連携はあるが、住民有志による非営利の活動であるため、無理なく合理的に成果を出しながら、活動を継続していくことを重要視したい。そのための課題は以下と考えている。

- 資金調達、人材確保、活動コストの低減
- 適切な事業規模・目標の設定
- 利活用できる空き家の掘り起こし

そして、芽が出つつある、定住人口増加に繋げていきたい。



新潟市「実家の茶の間 紫竹」の視察



空き家DIY改修ワークショップ風景



里山保全作業 体験観光農園 整備の様子

事業名	豊島 島キッチンお弁当・お惣菜配達事業		
団体名	特定非営利活動法人瀬戸内こえびネットワーク	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	北川 フラム	活動地域(都道府県名)	香川県 土庄町豊島

活動の目的

手間のかかる揚げ物の調理や、普段あまり食べないようなものを選び島内の高齢者などの食事の豊かさを担保し食事の楽しさを提供する。また郷土料理や島のお母さんに教わった料理をメニューに加え、長期的には、郷土料理や島のお母さんたちのレシピを共有できるアーカイブづくりを行う。また島キッチンで働く島のお母さんの高齢化が課題となっており、お弁当のお手伝いから気軽に参加していただきながら新規雇用の開拓を行う。

注文用紙を兼ねている島キッチン新聞を島内全戸に配達することで、島キッチンを身近に感じてもらい、島のお誕生会とパッケージで島内の世代間や地域間の分断を緩やかにつなげる役割を果たす。

活動の経過

活動目標を踏まえ、以下3点に重点を置き事業展開をした。

- 郷土料理や普段自分では調理しないようなバラエティのあるメニュー設定
 - 郷土料理のアーカイブ
 - 島民のお弁当お手伝い募集
- コロナウィルス感染拡大期に休業を余儀なくされる時期もあり、月2回のお弁当日を最大6回に増やし家族でも楽しめるメニュー(中華メニュー)を展開するなど工夫した。
また、お弁当配達をする中で島民からメニューのリクエストがあることもあり、高齢層より希望の多かった寿司もメニューに組み込んだ。
6月にニーズ把握やキッチン弁当に関するアンケートを実施。2010年よりお世話になっている丸ノ内ホテルの山口総料理長ともオンラインミーティングを月に1回行い、アドバイスをもらいながらメニュー開発や改良に挑んだ。注文がしやすいように、島キッチン新聞にQRコードを掲載し注文フォームから申し込めるようにした。
 - 各地区で行われている老人会の輪投げの会にお邪魔し、交流を図るとともに、島の食(食の歳時記)のヒアリングを行った。
 - 島キッチン新聞でお弁当のお手伝いを募集。30代から70代までの8名の方に参加いただいた。
内3名は瀬戸内国際芸術祭2020春会期より雇用し、オフィシャルツアー弁当対応で活躍した。

参考資料/豊島の食の歳時記、島キッチン新聞

活動の成果

お弁当販売実績 2021年4月～2022年3月 計1705食

弁当日	メニュー	販売数
4月 9日	鶏の照り焼弁当	34
4月23日	鶏の照り焼弁当	65
4月26日	油淋鶏弁当	49
5月10日	肉団子弁当	40
5月14日	のり弁当	33
5月17日	酢豚弁当	37
5月24日	油淋鶏弁当	37
5月28日	のり弁当	19
5月31日	肉団子弁当	22
6月 7日	鶏肉香草焼き弁当	41
6月11日	豚のしょうが焼き弁当	49
6月14日	和風ハンバーグ弁当	52
6月21日	豚のしょうが焼き弁当	47
6月28日	鶏香草焼き弁当	42
7月 5日	からあげ弁当	42
7月 9日	ミックスフライ弁当	54
7月12日	豚のミルフィーユ弁当	56
7月19日	ミックスフライ弁当	46
7月23日	豚のミルフィーユ弁当	26
7月26日	からあげ弁当	21
8月20日	コロッケ弁当	61
8月27日	肉団子弁当	58
9月10日	ラトウユウ弁当	56
9月17日	焼き魚弁当	49
10月 8日	のり弁当	56
10月22日	いなり弁当	92
11月12日	バラエティ弁当	43
12月10日	かきまぜと煮魚弁当	59
12月24日	Xmas弁当	66
1月14日	のり弁当	56
1月28日	コロッケ弁当	67
2月18日	鶏南蛮弁当	48
2月25日	巻き寿司弁当	64
3月11日	ちらし寿司弁当	62
3月25日	酢豚弁当	56

今後の課題と展望

- 豊島でも島外のお弁当事業者が参入し、老人弁当を展開しているが、豊島の野菜を使い、手作りの良さを生かし「楽しみに待つお弁当」を目指し、販売数を安定させる。
- 今年度の活動で老人会とのネットワークができたので、丁寧なヒアリングを行い、縁を繋ぎ引き続き、島内の世代間や地域間の分断を緩やかにつなげる役割を果たす。
- 島の方を芸術祭年だけではなく、継続雇用できるように利益向上を目指す。



お弁当づくりの様子



食の歳時記作成(ヒアリングの様子)



新聞配達の様子

事業名		讃岐六条の水車復元と保存活用	
団体名	高原水車友の会	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	平田 恵美	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 高松市六条町

活動の目的

江戸時代末から讃岐特有の溜池の水を利用して精米製粉事業を続けてきた水車機構が、1995年頃停止したが、その文化的価値を評価する人たちによって復元保存活動が始まった。復元にあって大切にしたいことは、讃岐の地理的特徴と水車大工の伝統的技術を守る事であった。水輪・歯車・石臼の復元は達成したが、現在循環装置(搬送と篩)の復元は、文化財(登録有形民俗文化財)保存と現役復帰の間でさらに調査が必要となり、復元の歩みが遅くなっている。しかし、粉を挽きうどんやパン作りに役立てるといった目標は変わっていない。また、木を使った水車の技術を伝承していくことは同程度に重要である。さらに水車のダイナミックな動きを子どもたちに味わってもらいたい。

活動の経過

- 古い水輪(文化財)を保存するため、長屋の壁を修理し、棚を作り、水輪のパーツを収納展示した。専門の左官職の方と香川大学創造工学部学生、水車友の会メンバーの共同作業で完成した。(6月～11月)
- 高原水車資料から昭和14年ごろ水車の篩絹(ふるいぎぬ)を購入していた呉服店と連絡が取れ、残っていた篩絹をいただくことが出来た。(8月)
- 水車の一部を組立展示するための土台を設置した。野瀬水車大工を友の会が手伝った。(9月)
- 例年の蕎麦収穫(11月)
- 林小学校3年生地域学習実施。事前にビデオを見てもらい、当日は人数を制限して実施した。(11月)
- もち麦栽培の麦蒔き作業。(12月)
- 香川大学学生が水車に関心を持ち、ボランティア参加。コーヒースタンド作製を友の会メンバーが協力指導した。(1月～3月)
- 香川大学教育学部教授・大学院生が水車を見学し、その後、リモートも含めて勉強会を開いた。今後交流を続けていくことになった。(1月・3月)
- コロナ禍で、毎年5月に開いている総会は中止したが、毎月末土曜日には水車場を公開し、見学者に楽しんでもらった。新しい友の会メンバーも増えた。お雑祭りの季節には抹茶を振舞うことが習慣になっている。

活動の成果

- 早く水力で粉を挽けるようにと願っているが、今年1年間の歩みは少し緩かった。10年間の活動の中で、大切なメンバーが高齢のため亡くなることを経験すると、もっと早く粉が挽けるところを見てもらいたかったと残念である。
- しかしコロナ禍でありながらも、毎月の公開日も元気に開くことが出来、何よりも新しい若いグループとの交流が出来たことはうれしいことである。思いがけず地元の香川大学の学生や教授の方々が、加わって下さったのは幸運である。しかしこれまで遠い九州や阪神、東京から応援して下さいた大工さんや大学教授の方たちの努力の積み重ねがあったことを何よりも大切に、良い関係を保って活動を続けていきたい。
- 「水車通信」は5月と12月に発行できた。ホームページなどで発信する準備はしてきたが、時間がかかりやっと一歩を踏み出した。
- また、水車のまわりの環境が大きく変わろうとしているとき、より深く水車とそれを支える土木遺構の大切さを認識することが出来た。100年以上壊れなかった石組の水路の上を重量級の車両が通ることは、間違っているのではないかと考えるようになった。水路の石組の中にカメラを据えて調査をした私たち水車友の会であるからこそ言えることではないかと思う。活動の成果というには少し抽象的だが、これも進歩ではないかと思っている。

今後の課題と展望

石臼で挽いた粉を上を篩まで運ぶ搬送機構(讃岐では数珠線りという)の復元には、二通りの考えがある。古い綱と板をそのまま残してそれ以上動かさないという案と古い装置は取り出し保存し、新しい装置を作り動かし製粉作業をさせる案とである。文化庁の了承を得て、後者の方向に進めるのではないかと考えている。その場合新しい装置は「模型」という扱いになる。また、展示も進めたい。

今後の水車の維持管理を個人の手で続けることは難しい。法人組織にするか、大学や公的な機関に協力を頼むかなど困難な課題がある。水車には農地も付属している。



大学生が水車場でコーヒースタンドを作製



長屋の新しい棚に古い水輪を収納する



古い道具を使ってもち麦の蒔き作業

事業名	琴弾公園の魅力を高める活動		
団体名	いいまちづくり観音寺輝き隊	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	大西 やえ子	活動地域(都道府県名)	香川県 詳細エリア 観音寺市 八幡町 県立琴弾公園

活動の目的

琴弾公園は歴史のある公園で、全国からたくさんの観光客が訪れている。観音寺市の観光資源として重要な場所でありながら名勝、県立公園など規制が多くあり開発、新規事業が行われにくい。また、敷地が広く、掃除が行き届かない現状がある。地域住民が琴弾公園にある歴史的建造物やいわれなどを十分把握しておらず、地元で誇るべき琴弾公園があることへの認識が低い。そこで私達は結成以来、公園清掃の市民参加を募り、定期的に清掃活動を行うことや市や県へ要望書を出し、琴弾山の山頂にある高灯籠からの眺望を取り戻すための働きかけ、さらに琴弾公園の魅力をアピールするイベント(今回は灯りイベント)を行い地域住民の琴弾公園に対する意識の向上をめざそうと考えた。

活動の経過

- 1 今まで進めてきた清掃活動の継続やいいまちづくり観音寺輝き隊通信での琴弾公園のPRの継続については予定通り実施することができた。
- 2 今年度当初、観光客に理解できる案内板の製作を考えていた。まず、市の商工観光課に相談し、文化振興課など関係する課にも話をもちかけたところ、県立公園のため様々な規制があることがわかった。公園内の案内板を調べ、「瀬戸内海 国立公園 観音寺松原」の看板が少ないことに気がついた。新たに看板を建てるのが難しいのなら、すでに建っている看板(ここでのタバコは火事のもとなど)の下側に補助的につけたらどうかと考え具体的に紙で模型を作り、実際の看板に付けた写真を添付した文書を市へ提出した。さらに県へも要望した。すると県から、可能ではあるが、3年毎に料金を支払う(宣伝料)ことになるとのことであり、納得できず断念した。
- 3 琴弾公園のライトアップにより、公園への関心を高め、観音寺市の夜型観光の推進や気運を盛り上げようと考えた。予想以上に多くの参加者があり今後は観音寺市や商工会、観光協会などと協力しながら継続できる方法を考えたい。
- 4 琴弾公園の魅力(歴史的建造物、石碑、いわれなど)を幅広い年代層に伝えていくための人材を育てるためにガイド養成講座を開いた(5日間)。
- 5 高灯籠の周辺の木の伐採により景観を取り戻そうと市や県への働きかけを継続した。

活動の成果

- 1 琴弾公園の清掃活動に関して2022年2月24日に四国新聞の四国4者協同企画「地域を創る 四国を拓く」のコーナーで[琴弾公園の魅力発信]というタイトルで掲載された。この記事を読み、市外から家族全員で琴弾公園を訪れたことや清掃が行き届いているという嬉しい感想を頂いた。
- 2 案内板製作は実現できなかったが、市や県に訴えることで、行政側に公園周辺整備への意識の高まりを促したのではないかと考えられ、2～3年前からの要望が実を結んでいる。例えば藤棚下のベンチ(丸太)や児童公園のベンチ(木材)が削り、塗り直されたり、木の交換がされたりしてきれいになった。
- 3 琴弾公園のライトアップイベント(2021年10月20、21日)は、2日間のアンケート調査で回答者が123人。(イベント参加者数は2倍以上だと思われる)参加者が公園のライトアップに満足してくれた様子や継続を願う様子がわかった。
- 4 ガイド養成講座は定員20人を超す参加希望があり、大盛況だった。野外学習、室内学習が5日間に渡り行われ、一定以上の参加により修了書を渡した。1人1人からの感想を聞くと琴弾公園の新たな魅力を発見でき有意義だったという内容のものが多かった。
- 5 琴弾山山上にある高灯籠からの景観の素晴らしさは市の歴史書にも書かれているが、手入れが十分でなく、雑木が茂り、景観を覆い隠している状態であった。4年前から私達は市や県に働きかけていた。今年度、香川県知事の中学卒業頃の写真を県議会議員に提示してぜひ景観を取り戻したいと代表質問の形で取り上げて頂いた。このことの効果もあり、2022年3月25日について雑木の伐採が実現した。

今後の課題と展望

- 1 いいまちづくり観音寺輝き隊通信は琴弾公園の清掃活動のお誘い、公園の歴史・クイズを中心とした内容で毎月発行し、市内35カ所、400部を配布している。観音寺市広報のホームページにも載せられており、Facebookでも配信している。しかしまだ知名度は低いと思われる。もっとアピールする方法を考え、支持者・賛同者を増やしたい。
- 2 観音寺市や商工会、観光協会などと協力しながら行えるイベント(ライトアップ、武者行列)なども考えたい。
- 3 今年度、高灯籠付近の雑木が伐採されたが100%ではないのでさらに働きかけをして歴史的景観を100%取り戻したい。
- 4 ガイド養成講座のスキルアップ編を行いたい。



琴弾公園の掃除活動



琴弾公園散策ガイド養成講座第1回目



夜の琴弾公園～灯りイベント～

事業名	鞆の浦の大正期を代表する吉本家住宅の保存・活用プロジェクト		
団体名	特定非営利活動法人鞆まちづくり工房	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	松居 秀子	活動地域(都道府県名)	広島県 詳細エリア 福山市鞆町鞆

活動の目的

江戸期からの希少な町並みが残る福山市鞆町において、大正期に建築された町家である吉本家は鞆の浦の町家意匠の変遷を知る上で重要な建築物であり、その文化的価値は高いものである。私たちは、この吉本家における希少性を鞆の建築文化の側面から明らかにするとともに、その保全利活用を具現化すべく修復及び事業化検討を進めていくことを目的としている。2021年度は、2020年度の調査にて得られた知見をもとに、登録文化財申請に向けたサーベイの実施及び、建物改修に向けた緊急修繕(屋根構造部)の実施が目的となる。

活動の経過

当初計画においては、鞆の浦の住民を広く勧誘して建物保全に向けた知識研鑽を図るワークショップ開催、そして登録文化財に向けた計画申請を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染に伴い、このようなイベント的な事業を行うことは困難となったことから、建築価値を定量的に評価するための学術調査、及び今後の利活用にあたって緊急的に必要となる建物改修を主な活動として実行した。

2021年10月には、奈良女子大学藤田教授による吉本家建物に関する詳細調査(2020年に引き続き実施したもの)を実施、翌年度以降速やかに登録文化財申請を行うための調査報告書を収受した。

他方、前年度調査にて明らかになった建物屋根部の腐食と、腐食にともなう主要構造部への傷みが激しいことから、今後の利活用にあたってまず必要となる屋根部材の補強工事を2021年9月下旬より実施、完全ではないものの今後の利活用において最低限必要な補修工事を実施したものである。

なお、計画対象次期外ではあるが、2022年4月には藤田教授による調査資料を貼付のうえ、福山市文化財課に対して本件建物の登録文化財申請を行った。

活動の成果

2021年度活動によって、大まかに2点の成果が得られた。

- 1 建物の希少性に基づき登録文化財申請準備ができたこと
 - 2020年からの2か年調査に基づき、吉本家の登録文化財申請に向けた基礎調査を完了させることができた。これによれば、吉本家は大正6年以前に建設された近代の小規模工業経営者の典型的家屋であり、中庭には茶室も建てて会社経営者にふさわしい接客機能を設けているほか、女中部屋が入る角部屋も設けられているなど、当時の生活様式を色濃く反映している。
 - 離れ座敷の2階天井には屋久杉を使用する等、高級な仕上げも見られ、一部建物については明治時代若しくはそれ以前の建築とも指摘されている。
 - 複数建物から構成される吉本家は明治時代の港町としての鞆の浦の景観を示す貴重な建造物である可能性が高いと評価されている。
- 2 吉本家の緊急修繕が実施できたこと
 - 2020年度報告にて指摘させて頂いた通り、本件建物については特に主屋の屋根構造部に激しい傷みがあり、これに伴って主要構造部へ腐食が発生しているとの指摘を受けている。
 - これを急ぎ解消するため、2021年9月より主屋の屋根構造部に対してブルーシートを展開し、漏水を防ぐようにしたうえで、腐食した屋根及び柱、床及び梁の一部の補強交換を行うなど、建物の腐食を防止する措置を行った。
 - これら補強交換工事によって、今後漏水による腐食が発生する可能性を下げることができた。

なお、本件助成対象外であるが、2021年度の観光庁補助金との併用によって、本建物の利活用に向けた改修工事を行い、2022年2月末に完了している。

今後の課題と展望

本建物の所有会社として、新たに合同会社鞆鉦釘(以下、所有会社)を設立し、2022年2月17日付にて物件売買を実行した。これにより所有者による建物管理から、融資によって設立された所有会社による管理へと管理形態が移行した。

今後は、所有会社から合同会社鞆まちづくり会社が賃借したうえで、2022年7月頃を目途にワークプレイス及びゲストハウスとして開業する予定である。

本建物の利活用によって収益を得ながら、かかる収益を建物の維持管理、改修費用に充当させていくことによって、鞆の浦における自立的な建物保全を目指していく。



吉本家 居室(竣工後)



吉本家 工事中写真



吉本家 吹き抜け空間(竣工後)

事業名	小林和作旧居再起動計画		
団体名	NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	豊田 雅子	活動地域(都道府県名)	広島県
		詳細エリア	尾道市旧市街長江エリア

活動の目的

2020年の段階で解体の危機に直面していた「小林和作旧居」(1933年築)を保存し、然るべき活用方法を提案することで、この地域にとって重要な文化的資産を次世代に継承することが、本活動の目的である。

「小林和作旧居」は尾道旧市街の長江エリアに立地し、尾道を代表する画家・小林和作が40年にわたりアトリエ兼住居として使用した文化的・建築的にも重要な建物であるが、駅から遠い斜面地に立地し、中長期的保存活用には多くの課題も抱えている。NPO法人尾道空き家再生プロジェクトメンバーを中心に、建物の修繕をしつつ、今後の活用に向け、専門家を交えてアイデアを練り上げていく。その過程でトークイベントやワークショップなどを開催。また、並行して、この建物を調査し、建築的魅力を掘り下げや画家小林和作の業績についても再考していく。

活動の経過

まず、和作旧居の周辺環境整備と清掃作業を行い、5月には画家・小林和作についての理解を深めるために2回のトークイベント「小林和作を旧居で語る。旧居を語る。」を開催。

その後、8月に尾道市が開催した小林和作旧居活用事業者選定委員会によるプロポーザル審査が開催され、NPOとして当法人がプレゼンテーションを行い、審査の結果取得することが決定。その後、取得手続きを進め、11月上旬には和作ウィーク2021「小林和作をめぐる。」を開催。和作旧居を中心に和作ゆかりの場所である小野鐵之助邸、高橋家の3カ所を同時公開した。期間中、トークやワークショップ、展覧会やツアーなども開催。トークでは建築家・渡邊義孝による和作旧居の建築的見どころ解説と新田悟朗による空き家再生の事例紹介を行い、ワークショップ「アイデア編」では東京工業大学真野研究室がファシリテータとなり活用方法を参加者とともに考えた。ツアーは2回開催し、小野鐵之助邸、高橋家、小林和作旧居の3箇所を巡った。3軒それぞれの建築の特徴や関わりのあった人物について紹介しつつ、エリアの歴史的背景や、地形・景観の特徴を解説した。関連して和作マップと人物関連図を作成し資料として配布した。

その後、環境整備、清掃を進め、建築の再生ワークショップを2月に開催。

また12月より小林和作について研究し、和作旧居の活用方法を探る「和作研究会」を開始し、以降毎月実施している。

活動の成果

「小林和作旧居再起動計画」で行なった試みの成果を和作旧居のハード面、ソフト面および広域での影響の3点から述べる。

●ハード面

プロポーザルで小林和作旧居をNPOとして取得することで、建物を取り壊しの危機から救出し、再起動計画の実現に向け、具体的にスタートを切ることができた。各イベント前には建物の応急処置と、清掃、周辺環境整備を行い、和作旧居の持つ魅力をより引き出すことができた。建築の再生ワークショップでは数寄屋大工を講師として迎え、大学生を中心とした参加者と共に床下補強と仕上げを行い、損傷の大きかった入口付近の補修を完了することができた(参加者:12人)。

●ソフト面

トークイベント「小林和作を旧居で語る。旧居を語る。」ではこれまでの再生事例から再生方法のヒントを得ることができ、立場の違うゲストの話により、小林和作の人物像と芸術について新たな側面から知る機会になった。(参加者:5月4日19名、5月16日15名)和作ウィーク2021「小林和作をめぐる。」では和作旧居、小野鐵之助邸、高橋家の3カ所を同時公開し、普段内観できない小林和作ゆかりの邸宅内部を見学し、尾道の文化的土壌を振り返る貴重な機会となった(参加者:約300人)。関連のトークでは和作旧居の建築的魅力に対する理解を深め、ワークショップでは一般参加者とともに将来の再生活用方法を考え、再生計画を進めていく上で参考になるユニークな提案がなされた(参加者:18人)。また、ワークショップ開催を契機に「和作研究会」が発足し、継続的にアーカイブ作業と和作についての研究や意見交換を行っている。

●広域で

小林和作の親友、小野鐵之助邸が建てた病院建築「小野鐵之助邸」には小林和作壁画が残され、モダンな建築意匠も魅力的であるが、この建物も取り壊しの危機に直面していた。この度の一連の企画を通じて、その危機を脱し、今後の活用について考える見通しが生まれた。

今後の課題と展望

2022年度は、ワークショップ「アイデア編」で出た提案を参考にしつつ、将来的な活用についてのケーススタディとして多彩な仮活用イベントを行う。一連の実験を経た上で計画の具体化を図り、その内容を踏まえ、損傷の著しい箇所を修繕を中心に構造補強や水回りなどの改修を行い、中期的に自立した運用が可能になる基盤を整える。11月には恒例行事として再び「和作ウィーク」を開催。和作旧居のみならず、ゆかりの場所のリサーチや整備も行き同時公開。なかた美術館と連携し、小林和作蔵書のリスト化作業、作家リサーチも推進。和作旧居を起点に、尾道の失われゆく建築や街並み、忘れ去られようとしている文化的状況についての継承について、ハード・ソフト両面から取り組んでいく。



小林和作旧居建物についてのレクチャー



小林和作旧居でのトーク



小林和作旧居現場ワークショップ

事業名	全国へ発信！三原だるまと三原の魅力。		
団体名	パンパカンパニ	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	宮本 郁、水呉 成美	活動地域（都道府県名）	広島県 詳細エリア 三原市

活動の目的

三原市の民芸品である三原だるまとプログラミング教育を掛け合わせた、新たなプログラミング教材の開発を目指す活動として「MAKE!REMAKE!ミハラダルマ」のプロジェクトが生まれた。しかし2年間の取り組みの中で、三原だるま自体があまり市民に認知されていないことや、販売場所が少ないことなど、根本的な問題があることを実感した。

そのため、プログラミング教材の開発にかかわらず、さまざまなアウトプットやアプローチで三原だるまの魅力を発信し、まちを豊かにしていくことを目的としてプロジェクトを再出発させた。この度の助成では、その第一弾の活動として「知る」を発信するツールである三原だるまのWEBサイトを公開した。

活動の経過

活動の経過は、大きく5つの段階にわけられる。

- 1 活動の目的や目標についての再確認会議
- 2 WEBサイトのコンテンツ企画
- 3 制作へ向けて情報収集や取材、見学
- 4 WEBサイトのデザイン制作と構築
- 5 三原のお祭りである神明市開催日に合わせてサイト公開

まずMAKE!REMAKE!ミハラダルマの活動目的を改めて確立するため話し合いを重ねた。三原だるま自体の魅力についてメンバー内で意見を出し合い、サイトの内容に活かせるよう整理した。その結果、三原だるまの基本的な特徴や歴史、制作工程、クリエイター紹介、インタビュー記事、などをまとめたサイトにすることが決定し制作を開始した。サイトの制作にあたり、三原だるまに関係するさまざまな方と連絡を取り合い取材と編集を行った。三原だるまに興味をもってもらえるサイトになるよう、WEB制作の方とも試行錯誤を重ね、細部まで三原だるまを感じられるサイトが完成した。神明市は、昨年に引き続きコロナウィルスの影響で中止となったが、開催予定日であった2月11日にサイトを公開し、たくさんの方に見ていただいた。

活動の成果

- 4月～9月までプロジェクトメンバーで定期的にミーティングを行った。改めて三原だるまの魅力や問題点を出し合うことや、自分たちのデザイン業と本プロジェクトの関わり方、まちに三原だるまをどう残していきたいかなど、濃い話し合いを行うことができた。10年後20年後の未来を想像して今回の活動目的を決定することができたため、今後の活動の軸となるような、立ち返ることができるWEBサイトを完成させることができた。
- 10月～1月にかけてサイトの制作に向けた取材を行った。三原だるまに関わりを持つキーパーソンと出会い、実際にお話を伺うことができた。制作を進めるうちに、今までつながりのなかった各所が、それぞれの活動に興味を持ちはじめていると感じた。また、今後の新たな取材先がすでにいくつか確定した。
- 三原観光協会や三原市から後援をもらうことができ、より公式のWEBサイトに近づいた。
- 2月11日のサイト公開から4月30日までの間に424人のユーザーに利用された。
- 2月の段階ではURL検索がほとんどであったが、4月には90%の人が「三原だるま」「みはらだるま」と検索しており、その結果、検索ワード「三原だるま」「みはらだるま」で一番最初に出てくるWEBサイトとなった。
- 4月30日の段階で、ユーザーがサイトに滞在する平均時間は1分14秒となっており、TOPページだけでなく各ページも閲覧してもらえるサイトとなっている。
- アメリカ、ドイツ、中国など、海外からの利用もあった。

今後の課題と展望

- 今後も動き続けるサイトにするために、取材やサイトの企画を引き続き行う。
- 職人の方と話し合いを重ね、無理のない範囲でサイト内で販売ができるような体制を整えていく。また、販売する際にはプロジェクト限定パッケージを制作するなど、デザイン業とも絡めた活動を行う。
- 自分たちでも三原だるまを一から制作し販売する。
- 三原だるまを題材に活動を行う他団体との関係性を深める。



三原だるま職人との会議



WEB制作の方とデザイン会議



三原だるま WEB サイト完成

事業名	レモンチェッコ酒造でつなぐウィズコロナ時代の観光構築		
団体名	株式会社瀬戸内ジャムズガーデン	実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日
代表者名	松嶋 匡史	活動地域(都道府県名)	山口県 周防大島町

活動の目的

周防大島の人口減少は急速で2007年に約2.1万人だった人口は現在約1.5万人。過疎化の原因の一つは地域に経済的循環を生む産業を創ってこなかったことにある。付加価値をつけやすい加工業、観光産業がまだまだ小さい。主産業の一次産業では農産物を農産物のまま出荷したり、日帰り観光の島(宿泊客が少ない)となっている。そんな中、コロナ禍により島の飲食業界や観光事業者が大きな打撃を受けている。そこで、このような時代だからこそ地域に勇気と実益を生む100年産業を創ることを目的とし、周防大島の特産柑橘を使用した新しい特産品「レモンチェッコ(レモンのリキュール酒)」開発・製造に取組むとともに、長期安定的な関係人口構築のため「お客様と事業者が共に歩む」Withコロナ時代の新しい観光交流を構築する。

活動の経過

- これまでのレモンチェッコプロジェクトの活動状況
(まずはレモンチェッコの商品開発に向けた準備段階)
2018年10月～ 「アルベルゴディフーズ」で地域産業を創る勉強会を開始。イタリアのスローフード運動に詳しい島村菜津先生や金丸弘美先生にご来島いただき勉強会を実施
2020年 4月 コロナ禍の中、地域に新しい産業造りを決意し、周防大島町から内閣府へ「リキュール特区」申請を行っていただくよう上申(同年8月「周防大島果実酒・リキュール特区」認定)
2020年 8月 国税庁ヘリキュール酒造免許申請書を提出
2020年 9月 新しい観光造りにかかわっていただけるメンバー募集と設備資金集めのためクラウドファンディングを開始(11月に283名の参加者を得て終了)
2020年10月 酒造免許を取得。クラウドファンディングで集めた資金で製造設備を整え、商品開発を開始
2021年 2月 レモンチェッコの初蔵出し、および販売を3月から開始
- 2021年度の取り組み
(レモンチェッコプロジェクトの核となる「レモンの丘」の整備とつながり創り・商品バリエーションの拡大)
2021年 4月 レモンの丘の造成完了、記念植樹祭を開催ホームページの製作開始
2021年 6月 ホームページ・ECサイト制作完了
2021年11月 第2期の製造仕込み開始。多様な果実類と組み合わせた商品バリエーションの開発も開始

活動の成果

2021年度の目標である「レモンチェッコの開発及び販売の基礎を構築する」ことができた。具体的成果は下記の通り。

- 商品開発においては製造器具類の選定から実際の仕込み実験、そして商品の製造・販売までを行い、レモンチェッコ酒造事業の基礎を構築できた(年間目標製造量1klに対して年間製造量1.2klを達成)
 - シンボルとなる「レモンの丘」を造成し、共働メンバーと記念植樹会を開催した(コロナ第4波中のため、参加者は10組に制限したが参加者からはとても好評であった。その後もこのレモンの丘には定期的に来訪者があつた)。
 - Web上でのつながり創り(特命農業部員専用の特設サイトやeコマースを構築できた、これにより、コロナにより島を訪れることのできない方々ともつながりを維持すること、経済循環を造りだしていくことができています)
- また、受賞歴やメディア取材、講義依頼などの副次的成果は下記の通り。特筆すべきは、教育機関や行政が主導するイベントの講演依頼が増えており、一時的なブームというよりは、長期的な人材育成や社会活動の場においても、当取組みが評価・期待されていると感じている。その他に山口県「6次産業・農工商連携商品」としても認定された。
- 受賞/日本農業賞(大賞受賞)、農林水産祭(日本農林漁業振長賞受賞)
メディア/テレビ:NHK・テレビ山口・山口朝日放送・山口放送(継続取材を受けている)、雑誌:VOGUE・じゃらん・ゼクシィ等、新聞:中国新聞・朝日新聞・毎日新聞等
講演/山口農業高校、くじゅうアグリ創成塾、4Hクラブ(若手農業者の会)、周防大島高校、広島修道大学、農業未来塾(全国町村会)等

今後の課題と展望

2021年度まではレモンチェッコプロジェクト(概要は画像③を参照)の基盤構築を進めてきた。酒造設備・技術の確立から製造・販売までを実現させるとともに、レモン栽培を通じた地域とつながる関係人口の構築にも取り組んできた。次年度以降はこの基盤をさらに発展させ、地域の経済循環の一つの核に育てていくことを目指す。具体的には、地域を巻き込んだ果実生産体制やレモンチェッコの販売体制を構築していく。その一つとして2022年度に宿泊事業領域での取り組みを重点的に行う予定である。



レモンの丘でのレモン植樹祭 風景



開設した特設サイトと特命農業部員証



プロジェクト概要図

公益財団法人福武財団

地域振興助成
2021年度自主・共催助成
成果報告書

Fukutake Foundation

事業名	大地の芸術祭事業		
団体名	大地の芸術祭実行委員会		
代表者名	関口 芳史	活動地域(都道府県名)	新潟県
		詳細エリア	越後妻有地域(十日町市・津南町)

活動の目的

- 本事業は、当市の特徴である文化芸術資源の「現代アート」と豪雪が育んだ「雪国文化」を最大限に活用し、大地の芸術祭を国際的な文化事業として発信するものである。
- 昨今のコロナ禍における影響で誘客が見込めない場合であっても、「雪国文化」「里山文化」「農耕文化」を世界に発信し、その価値および魅力を伝え、コロナ収束後の誘客につなげる。

活動の内容

- 2022年度に延期した「大地の芸術祭」本会期を見据えた関連施設の先行リニューアルオープン(越後妻有里山現代美術館MonET・まつだい「農舞台」フィールドミュージアム)
- 恒常的な文化活動としてのキャンペーン期間を設定した誘客プロモーション(「今年の越後妻有」の開催)
- Webマガジンにおける定期的な記事アップ及び YouTube 動画配信(「運営/越後妻有の舞台裏から」「越後妻有のサイトスペシフィックな作家たち」)
- 食文化コンテンツの充実(芸術祭関連施設で提供する食メニュー開発、雪国の保存食を堪能できる雪見御膳ツアーの実施)

参加作家、参加人数

参加作家 / イリヤ&エミリア・カバコフ、目、ニコラ・ダロ、名和晃平、マルニクス・デネイス、森山大道、中谷ミチコ、エステル・ストックアー、豊福亮、鞍掛純一ほか

参加人数 / 今年の越後妻有 40,555 人
「大地の芸術祭」の里 越後妻有 2022 冬 5,569 人

他機関との連携状況

- NPO越後妻有里山協働機構 / 広報・施設における企画展・オフィシャルツアーなど
- 新潟県 / 広報・インバウンド・寄附協賛営業など

活動の効果

- 芸術祭関連施設のリニューアルオープンは、2022年に開催する「大地の芸術祭」のプロモーション的な効果を得た。
- コロナ対策を講じた施設開館やイベント実施は、コロナ禍で開催する「大地の芸術祭 2022」のシミュレーション及び事前点検として有効であった。
- オンラインコンテンツやWeb配信は、現地を訪れることのできない方々への芸術祭の訴求や、参加につながった。

活動の独自性

- 「大地の芸術祭」は、2000年から、自然、景観、食、行事、生活習慣、地域住民との交流など、越後妻有の里の資源すべてを「アート」を媒体として発信している。
- 国、地域、世代、ジャンルを越えた人々の交流と協働が新たな価値を見出し、過疎高齢化の進む地域に、誇りを取り戻すきっかけとなっている。
- オンラインコンテンツ・Webコンテンツにおいてもアート作品や作家の思い等を通じて発信することで、斬新な切り口による当地域の本質的な価値の発信を実現している。

総括

- 令和2年度から続く新型コロナウイルス感染拡大のパンデミックにより、「大地の芸術祭 越後妻有アトリエンナーレ」の延期を余儀なくされ、恒常的な施設開館を中心とした事業に変更した。
- 誘客プロモーションにおいても、コロナ禍により国外からはおろか、国内においても当初の計画が展開できずに、目標としていた入込客数には達しなかった。
- しかしながら、徹底した新型コロナウイルス感染予防対策を講じたうえで、施設に属した企画展やイベント等を実施することで安全・安心な旅を提供するベースが構築された。
- また、積極的にオンラインでの催しや、YouTube配信を展開することで、遠方や国外からのアクセスが増え、新たな手段の獲得とWeb上での広がりの可能性を見出すことができた。



目「movements」
Photo by Kioku Keizo



作家インタビュー動画(目)



大地の芸術祭の里越後妻有 2022 冬の様子
Photo by Nakamura Osamu

事業名	豊島「食プロジェクト」推進事業		
団体名	豊島「食プロジェクト」推進協議会		
代表者名	山本 彰治	活動地域（都道府県名）	香川県 詳細エリア 土庄町豊島

活動の目的

豊島における棚田をはじめとする山の幸と瀬戸内の地魚である海の幸などを活用し、食とアートの活動を展開することにより豊島の振興を図ることを目的とする。地元の住民、観光客、豊島美術館が一体となったプログラムを開発し、地域振興のための複合的な活動を続ける。

活動の経過

2010年(平成22年)に第1回瀬戸内国際芸術祭が開催。同年に開館した豊島美術館の建設予定地が唐櫃に決定した時点で、香川県から美術館の予定地周辺環境整備、具体的には棚田の復活を県事業で行いたいので、地元で協力してほしいという依頼があったのが、活動の始まりである。

2009年 4月に発足。補助事業により、棚田の復元作業を行う。

2010年 瀬戸内国際芸術祭2010の開催と豊島美術館の開館に合わせ、周辺環境の整備と棚田の復元作業を行う。

2011年以降 復元した棚田での耕作・維持管理のほか、3年に1度開催される瀬戸内国際芸術祭への協力、また、豊島棚田の収穫祭や季節の野菜の収穫体験を開催し、観光客と地元の交流をとおり、豊島の魅力の発信を続けている。

活動の成果

復元した棚田での農作物の栽培と景観の維持管理が活動の中心である。管理された棚田の風景は、隣接した豊島美術館、眼下の瀬戸内海と一体となった絶景であり、観光客だけでなく島民の心にも深く印象付けるものになっている。通常の維持管理のほか、年に3回は、地元住民、福武財団、町役場職員が協力して、用水路の清掃と周辺の草刈りを行い、豊島美術館を訪れた観光客が、いつでも棚田のあぜ道を歩き、昔ながらの農村風景を堪能できる環境を提供している。非常に労力が必要な活動であるが、単なる田畑としての役割だけではなく、豊島の観光資源として価値を信じて、今後も維持管理を続けたい。

今年も昨年に続きコロナウイルス感染症の影響があり、島外に向けてのイベントの開催は縮小せざるをえなかったが、島内の住民向けに、田植え体験、さつまいも収穫体験、みかん狩り、稲刈り体験などのイベントを開催した。

今年度は、棚田で栽培した農作物を使った商品開発に力を入れた。数年前から棚田で獲れたみかんを使ったみかんジュースを製造委託し販売していたが、今年は、米粉を使ったホットケーキミックス、麦のグラノーラ、バターナッツ、かぼちゃのポタージュスープを製造した。

また、これまでの棚田保全活動が認められ、令和4年農林水産省「つなぐ棚田遺産」に認定、香川県「さぬき棚田アワード」に選定された。

今後の課題と展望

商品開発では、数量が多く作れないため製造費が高くなり、販売額も高くなってしまいが課題であるが、補助金頼みにならない経営を目指しているので自主財源確保を目指し、今後も取り組みたい。

発足して10年以上経過し、島内外での認知度も高まり、活動も定着してきた。今後も当協議会の目的である豊島の振興のため、各種団体と協力し活動を続けたい。



田植え体験イベント



稲刈り体験イベント



さつまいも収穫体験イベント